昭和46年8月1日発行通巻21号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

8/1
220円
21

週刊 世界動物百科



増ページ！ネコ特集 定価すえおき

ペルシャ, バーマン, シャム, マンクス
アビシニア, ロシアンブルー, ハバナ
レックス, ニホンネコ など

イエネコのすべてをこの1冊に集めました

私たちの仲間　ネコに関する観察記録, 実験報告
飼育法, 愛猫記など満載

朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第21号

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第31ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告
７月28日発売



世界動物百科
22号　8／8

私たちの仲間
21号………8月1日

ネコ社会の〝対人関係〟

ネコの行動学　1

日高敏隆



ネコの評価は，人によってたいへんに違う。ものすごくネコ好きの人もいれば，〝ネコなんか，だーいきらい〟という人も多い。イヌをこわがる人はいるが，イヌを見て〝気味が悪い〟という人はいないだろう。けれど，ネコを無気味がる人は少なくないし，むかしから〝ネコは魔性〟という表現が，伝統的に通用している。その〝魔性〟の正体を『ネコの行動学』として，3回にわけて探ってみよう。

魔性といえば，女もそういわれる。ネコはイヌにくらべて，女性的な感じがすることも確かだろう。とくにネコのしなやかで美しいからだつきや身ごなしには，きわめて女性的なものがある。そして，それがいやだという人も多い。

ネコの何が，こういうさまざまな感じを人に与えるのだろうか？　ネコが〝顔を洗う〟のはなぜなのであろうか？　やかましいネコの〝恋歌〟を，うるさいと思う人もあれば，そこに一種の哀愁を感じる人もある。萩原朔太郎の〝大きな青い猫〟の無気味さは，いったいネコのどこからくるのだろうか？　イヌはあくまでイヌらしく，ネコにはあくまでネコらしいところがある。その〝ネコらしさ〟とはいったいなんなのであろう？　そういうことは，ネコの比較行動学的研究が明らかにしてくれるはずである。

そこで，ネコの行動に関する研究を，いろいろと捜してみた。その結果わかったことは，実に驚いたことに，ネコはそこらじゅうで見かける動物であるのに，ネコの行動のくわしい研究は意外と少ない，ということであった。

もちろん，〝ネコを使った〟実験はたくさんある。とくに最近は，神経生理学や大脳生理学の実験に，ネコがたくさん使われている。実験材料のためのネコを供給する，専門の〝ネコ屋〟もあるということだ。そして，ネコの脳のどの部分をこわすと怒りが起こるとか，さまざまなことが知られてきている。しかし，これらの研究は，人間の〝かわり〟にネコを使っているまでの話であって，その役割は，いわばかつての心理学の研究におけるシロネズミや，医学の研究におけるモルモット（テンジクネズミ）と同じものである。〝ネコそのもの〟を知ることが目的ではないのである。

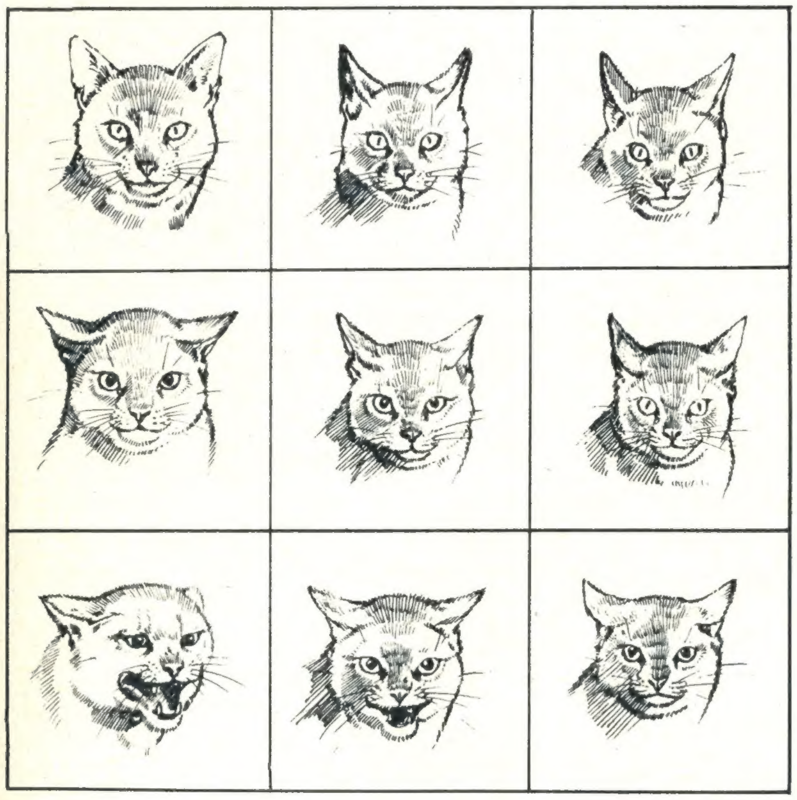
ネコとは，いったいどういう動物かを知ろうとして行なわれた研究は，ほんとうに数少ない。そのなかで，比較的近年に精力的な研究をしているのは，ドイツの比較行動学者パウル・ライハウゼン(Paul Leyhausen)である。かれの研究を中心にして，ネコの行動をみてみることにしよう。

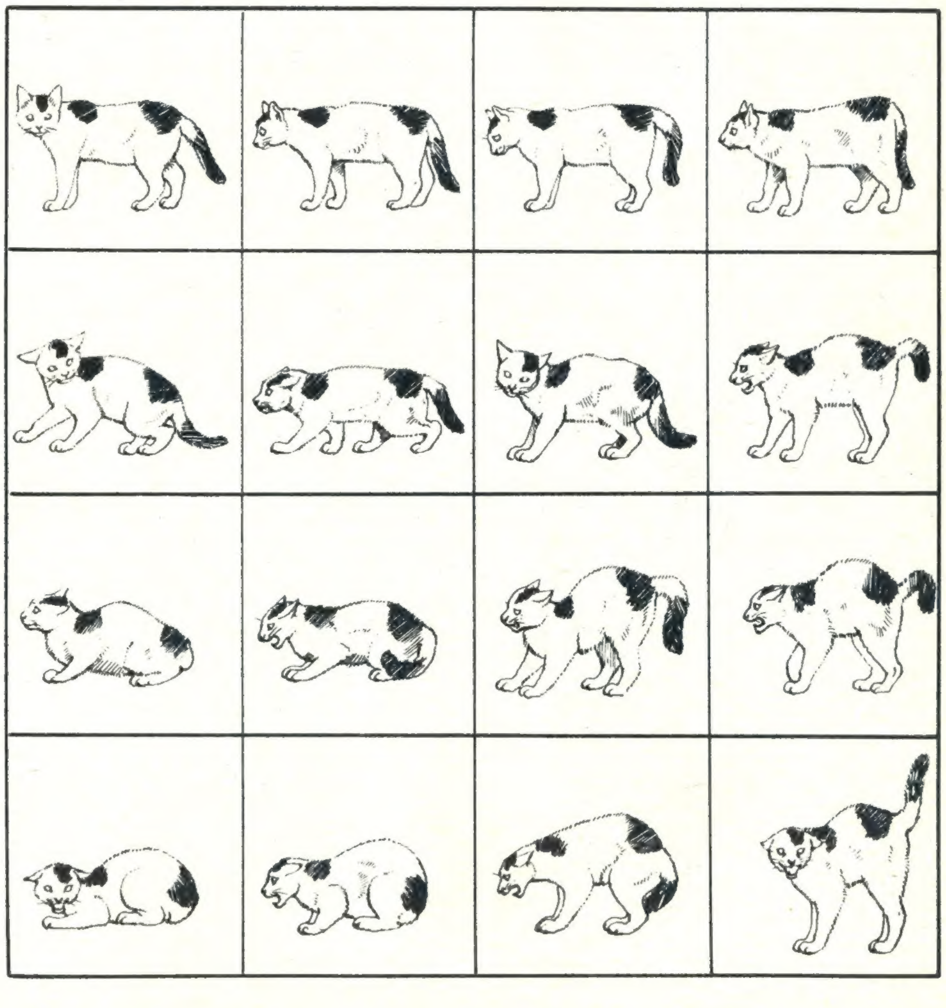
重複するなわ張り

ネコがそこらをのそのそ歩きまわっていたり，屋根の上でひなたぼっこをしている姿は，われわれにはたいへんなじみ深いものである。

歩きまわっているイヌは，ほかのイヌに出会うと，すぐ近寄っていくし，家の中にいるイヌも，近くを通りかかるほかのイヌに，いつも関心をもっていて，ワンワンほえたりする。けれどネコでは，繁殖期以外には，そのようなことはあまり見かけない。じっとすわっているネコは，ほかのネコが通りかかっても，別に出ていくわけでもなく，ただジーッと見ている。その目つきは，敵対意識に燃えて，ほかの女を観察する女の目つきに似ていなくもない。

ネコには，なわ張りというものはないのだろうか？　きわめておおまかにいえば，やはりそれはあるといえよう。それは，ネコがいつもいるホーム・グラウンド――つまり，ある部屋とか，庭とか，パトロール地域（ネコが規則的にたずねてまわる地点）とから成っている。これらの地点は，いつもきまって通る道で結





他のネコと対決するときのネコの表情（左）と姿勢（右）　え　清水　勝

両図とも，左上は敵がいないときのまったく中立的ムードの場合。左上から右へいくほど攻撃的ムードが強く，左上から下へいくほど防御的ムードが強い。左下は攻撃のムードがなくひたすら防御のムードに支配され，右上は恐怖心がなく，自信満々，攻撃に出ている状態である。右下は攻撃と防御が2つとも強く，攻撃にも防御にも出られないどっちつかずの状態。

ばれており，いちばん外側の地点どうしを結ぶ道が，なわ張りの境界に当たることになる。けれどネコは，この〝なわ張り〟を守るような行動はしない。したがって，〝なわ張りとは，同種他個体の侵入に対して防衛される地域〟という，通常のなわ張りの定義からすれば，これは真のなわ張りではなくて，いわゆる〝ホーム・レンジ〟（行動圏）にすぎないことになる。

ネコは自分のホーム・グラウンドを，すみずみまで細かく知っており，そのなかに休息の場所，ひなたぼっこの場所，見張りの場所などを決めている。狩り，交尾，パトロール，闘争などの場は，この外側のパトロール地域のなかに設けられる。そして，いつも使われる道以外の部分は，原則として通らない。パトロール地域をふくめた行動圏は，30〜50ヘクタールぐらいである。

ネコは人間に飼われている動物であるために，自分のホーム・グラウンドを自分で選ぶことができない。子ネコがある家にもらわれてきて，そこで養われることになれば，どうでもその家をホーム・グラウンドにせざるをえない。と同時に，ネコは一般の野生動物と違って，自分たちの個体数や〝人口密度〟を，自分で調節するわけにはいかない。飼い主が，次々とネコを拾ってきて飼うような場合には，ネコのあいだに多少のトラブルはあるにせよ，原則的には多数の仲間と共存していかねばならなくなる。

ネコのなわ張りがあまり明確でないのも，このような理由によるものかもしれない。そればかりでなく，狩りの場や通り道，ひなたぼっこの場所，見張り場などの〝交差〟もしばしばみられる。つまり，そのような場所は，多くのネコによって，共同に利用されることが多いのである。

けれど，よく観察してみると，それらの場所は，〝共同〟利用はされているが，〝同時〟使用はされていないことがわかる。そして，ネコたちは１日じゅう，ほかのネコと〝個人的〟に出会うことを極力避けており，たとえ同じ家に飼われているネコでも，外に出れば単独で行動していることが多い。

ネコ道での〝交通規制〟

２匹のネコが，はち合わせしないという〝交通規制〟は，視覚によって行なわれている。つまり，ネコはほかのネコの行動を目で見ていて，それに応じて自分の行動を決めていくのである。たとえば，１匹のネコが25メートルから100メートル近く離れた道（ネコの道）を歩いていくほかのネコを，それが視界から消えるまでジーッと目で追っていく光景は，しばしば見かけられる。たいていの場合，しばらくすると，こんどはいま見ていたほうのネコがやおら起きあがり，同じ道を通って歩きだす。



ひなたぼっこ　古い書だなが段々ベッドの代用をつとめる。これは人がのせたのでなくおのおので勝手に場所をとり，お気に入りの段にしか乗らない

乾信一郎（説明・写真）

もし，たまたま２匹のネコが，同じ道を違う方向から歩いてきて，たがいに相手にかなり遠くから気づいたときにも，どちらかが相手に襲いかかるようなことはしない。見通しのきかない場所で，２匹が突然出くわしたような場合には，対決はもっときびしくなるわけであるが，それでも闘争は起こらない。

じっと見つめあっているうちに，どちらが優位なのかがしだいにわかってくる。以前負けたことのあるほうが，ちゅうちょなく逃げだす。もし，相手がなおも近づいてきたときだけ，優位のものが相手を追い，それでも近づいてくると，前肢（ぜんし）でひっかく。一般に雌ネコのほうが，雄ネコより忍耐力がなく，けんかを始めやすいという。

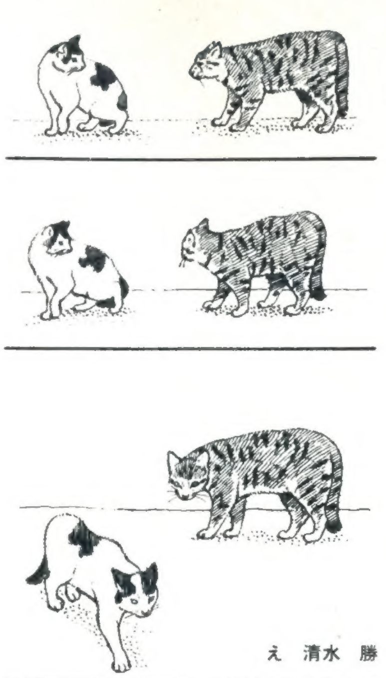
絶対的でない順位制

けれど，このような路上の対決での〝優位〟から，そこらにすむネコたちのあいだに確固とした社会的順位が生じるわけではない。非常に〝高い順位〟にあると考えられるネコが，ずっと下位のネコのホーム・レンジ，それもホーム・グラウンドにまで，なんの抵抗を受けることもなく平気ではいっていくことがある。これはネコの〝なわ張り〟が真のなわ張りでないことを示す１つの例である。もしこれが真のなわ張りであるならば，侵入者がいかに順位が高くとも，なわ張り所有者のほうが勝てば，侵入者は追いだされるはずである。

それと同時に，これはネコの順位関係の特殊性を示すものでもある。というのは，もし順位制が確固としたものであるならば，この高位のネコはいつも下位のネコのホーム・グラウンドに侵入できるはずであるが，そのようなことが慣例になっているわけではない。そして，下位のネコをそのホーム・グラウンドから追いだすことも，まず決してないことだ。

つまり，路上での対決による順位は，きわめて局所的な，しかもそのときだけの順位であって，ほかの動物にみられるような，順位争いの結果確定された絶対的順位ではないのである。

しかしこれは，たがいに顔を知りあっているネコどうしの場合であって，相手が見知らぬネコであると，状況はもっと悪化し，当然そこに敵対的な関係が生じてくる。



え　清水　勝

２匹の雄ネコが出会ったとき，弱いほうのネコ（左）は，はうようにして立ち去る。強いほうのネコはそれを追わない

優劣を示す姿勢と表情

２匹のネコが敵対関係でにらみあっているとき，両者はさまざまな姿勢をとり，いろいろな表情をする。この姿勢や表情は，ネコが意識してとっているものではなく，そのネコの〝生理的気分〟（ムードという）がそのまま外に表われてしまうという性質のものである。

相手に直面しているネコは，当然相手を攻撃しようという衝動にかられる。その状態が〝攻撃の生理的気分〟（攻撃的ムード）である。ところが，一方，相手を見ると，なんとなく恐ろしくなって，逃げよう，防御しようという〝防御的ムード〟にもなる。この攻・防の２つのムードが１つの個体のなかで葛藤（かっとう）を起こす。そのときどちらのムードがどれくらい他方にまさっているかによって，外に表われる姿勢や表情が違ってくるのである。これを模型的に示したものが前ページの２つの図である。どれも読者にはみな思いあたるところがあろう。

この図を頭に入れておくと，にらみあっている２匹のネコの戦いは，最後まで見ていなくとも結末の予想がつく。そして，ネコどうしでもそれがわかるのである。図のより左側，そしてより下側のようすを示しているネコは，より右，上側のようすを示しているネコを見れば，すぐ自分の劣勢を理解して逃げてしまう。

けれど２匹が右下のようすを示しているときは，どうしようもない。どちらもあとへはひかないからで，こういうときは，激しいけんかが起こる可能性が高い。

顔ふき，ゴロゴロを解読する

——わが家のネコ観察記——

畑　正憲



モーレツネコの怪電波

今年のはじめ「朝日新聞」の投書欄に，ネコに関する投書が2つのった。

1つは，ネコの顔ふき行動についてのもので，ネコが丹念にひげを磨くのは静電気を起こしているのじゃないかと推論してあった。

もう1つの投書はこれに刺激されたものであり，静電気については知らないが，入念に顔をふく時，耳を撫でるのには意味がありそうだ。耳を動かして内耳と外耳の圧力を等しくしているのであり，その行動によって天気予報ができるのじゃないかと主張してあった。

「科学朝日」46年1月号のネコの特集でもひげ磨きに触れてあった。その筆者は，ひげのほこりなどを払って，感覚を鋭敏にしているのじゃないかと結んでいた。

ネコは比較的ひっそりとしていて，意味不明の行動をとりがちだから，昔からさまざまな伝説めいた事実がある。世界に例を求めれば，ものすごいネコが続々と登場する怪猫物語がやすやすとできそうである。イヌと違って，ネコに魔性を感ずるのは世界的な傾向らしい。

動物の体毛に静電気が生じるのは，愛育している人ならしばしば経験していることだろう。イヌでもネコでも，日だまりで寝そべっているものを撫でると，パチパチと小さな音をたてて放電する。特にネコは，日の当たる場所で昼寝をするのが好きだから，この傾向が強い。

外国の権威あるネコの解説書には，もっとすごい例がある。怪電波を発し，そのネコが闊歩する所，たちまちテレビの画像が乱れるというのである。科学者でもあるその筆者は〝事実だから仕方がない〟と半ばあきらめた恰好である。

こういうモーレツネコに関しては，実際に手元に置いてみるまで信じられないが，静電気に関しては，まったく付随的な現象であり，生態的な意味はないと断言できそうだ。生物の細胞には，ある電位があり，細胞が活動する際にその電位の源になる膜の透過性が変わって活動電位が生じる事実は，さまざまな細胞で確かめられているが，それは生きている膜や原形質が関係していて意味があるのであり，体毛に貯まるのは，われわれのシャツの間に静電気が起こるのと同じであろう。

狩りの障害になる体臭

天気予報については，これも古来まことしやかな説が多い。木村喜久弥氏は『ねこ』という本の中で特別な章を設けている位である。三毛のオスを船に乗せたことにはじまり，内耳の圧力説までいろいろである。

私は潜水するので，特に耳が敏感である。無理をして内耳のどこかがはれた場合，お説の通り，ときどき耳たぶを動かさないと圧力の違いでもの音が聞き取り難くなる。が，嗅覚よりむしろ聴覚と視覚の動物であるネコが，ひんぱんに難聴になるとは信じられない。

そこで，わが家のネコの観察を続けてみた。

すると簡単に結論が出た。ひげ磨きと顔ふきの回数が最も多いのは，食事の後と眠りに入る前である。

食事の後というのは，言うまでもない，食べ物の匂いが口のまわりにつくからである。

総じてネコは，他の匂いがからだにつくのを嫌う習性を持っている。これはイヌなどとは獲物を捕食する方法がまるで違うせいでもあろう。どちらかと言えばイヌは，積極的に追う動物である。山などへ入ると，ねらった相手の糞をむしろ自分のからだにこすりつけて，獲物が穴へ逃げこめば中へ入ろうとするし，入れない場合なら掘ろうとする。ダックスフントなどの足が短いイヌは，その習性を利用して，穴へ潜入できるように仕立てられたものである。

ところがネコは違う。追うよりも，待ち伏せする動物である。

私は横浜にいた際，人を雇って，わが家のネコの1日の行動をくわしく追ったことがあるが，ネズミを発見した時の辛抱強さにはこちらがあきれる位である。穴に逃げこんだ場合，1時間でも2時間でも，化石と化して穴の口にうずくまっている。そういう場合に障害になるのが自らの体臭である。徹底的に匂いを消そうと努めるのである。

眠る場合には，いくぶん意味が違ってもこよう。比較的体型が小さいため，外敵に襲われないようにしつこく匂いをとると考えてもよいかと思う。家の中で飼う場合に，大小便のしつけが簡単なのはそのためである。

ネコの排便，排尿のもようを思い出していただきたい。そのとばっちりが，からだにつかない姿勢では決してない。小便の場合は多少腰を低くし，尻の毛が濡れている。が彼らはその匂いを徹底的に舐めてとる。

それを改めて知ったのは，わが家のネコがつぎつぎに流感にかかった時のことであった。鼻水が出て鼻口がふさがってしまう。と，途端に，ネコたちはうすよごれて異臭をただよわせ始めた。普通なら舐めとってしまう匂いが自分ではわからなくなってしまうのである。

匂いを嫌うのは，食事の姿勢でもよくわかる。ネコは前足をそろえ，首を伸ばして魚を噛みくだく。よほどのことがなければ，前足を使ったりしない。ただし，ひげが魚に触れるのは仕方がないので，食事の後ひげを入念に磨くのである。ほこりをとって鋭敏にしたりしてはいない，匂いをとっているのである。

催眠効果もある顔ふき

これを劇的に実験するには，ネコが嫌う匂いをからだにつけてやればいい。腐肉汁，魚の汁，酢など，どれを使ってもいいが，それを混ぜても効果がある。それを頭や肩につけると，必死で顔ふきをして，後でぐったりして眠ってしまう。

この匂いとりの行動を，しばしばネコの愛撫だと勘違いしている愛猫家がいるのはほほえましい。

「うちのネコは，わたしが蒲団に入るとやってきて，それは念入りにわたしの口もとを舐めてから，やっと落ち着いて眠るのですよ。ざらざらしてはじめ厭だったけど，とてもかわいくって……」

そのご婦人には，就寝前の間食と薄化粧をやめて貰った。するとかの愛猫は，自分のからだを舐めるようになった。

これも簡単に実験できる。ネコがからだを舐めこれから眠りにつこうとする瞬間に，手やからだや顔の一部に強い匂いの源をつけ，そい寝をしてみることだ。ネコは自分を舐めずに，その匂いの源を消そうとするだろう。

⇨（次ページ上段へ）

萩原朔太郎の詩のなかに，しっぽをピンと立てたネコが2匹，屋根の上で「おわあ，こんばんは」といいかわしているというのがあるけれど，残念ながらこの大詩人のカンも少しはずれていたようだ。この姿勢をとっているネコは，とても相手に〝こんばんは！〟といえる状態にはないのである。

ネコ世界の決闘

ただし，この防御の姿勢は，決して降伏の姿勢ではない。ローレンツの研究（「ソロモンの指環」早川書房刊，第13章『武器とモラル』参照）で，今では有名になったオオカミやシチメンチョウの場合には，負けたと感じたほうは，自分の最大の急所（オオカミでは首，シチメンチョウでは後頭部と首）をみずから相手の前に差しだして，降伏の姿勢をとる。すると，この姿勢が勝った側の攻撃を抑制するので，戦いはふつう流血にいたらずに終わり，勝敗が決まる。ところがネコの場合，防御の姿勢をとっているネコは，急所（おそらく首すじであろう）を差しだすどころではなく，首をちぢめてかたく守っている。そしてこの姿勢には勝者の攻撃を抑制する作用もないらしく，負けたほうが逃げださなければ，勝者は前肢のつめで敗者をひっかく（さすがに首すじをガブリとまではやらない）。すると，負けたほうも，決してすんなりカブトを脱ぐのではなく，これまたすばやく手を出して，勝者をひっかこうとする。その意味でネコの戦いは，ほかの猛獣の戦いとはだいぶようすが違っていてルールのきちんと定まった決闘のように〝儀式化〟されてはいないのである。

けれど，決闘のルールがないからといって，ネコの社会がまったく無法者の世界だというわけではない。前にもちょっと述べたとおり，ネコには順位はあるがあいまいである。そして雌より力も強く，戦ったら，当然激しいことになる雄ネコのほうが，実は雌より忍耐強いのである。

雄はほかの見知らぬ雄が自分のホーム・グラウンドにはいってきても，季節と関係なくほとんど真剣な闘争をしない。だいぶ時間がたってはじめて，どちらが強いかを決めようということになる。そのときは，2匹の〝意見の相違〟を解決するために，もっぱら威嚇の競争が行なわれる。

こうして2匹の順位はほぼ決まるのだが，それでもなお，どちらかが徹底的に勝ち，もう一方が徹底的に敗れたというわけではない。この〝ほぼ〟順位がそのまま公式の順位となる。しかもそれによって，この2匹がはっきりした上下関係

➡（次ページ下段へ）

⇨（前ページ上段より）

何匹もネコを飼っている人なら，その群れの行動を見ているだけでいい。満腹して寝ているネコたちの側へ，食事を終わったばかりのネコが腹這になると，全員でその匂いを消そうと舐め始める。

余談になるが，この顔ふき行動などには，催眠効果もあるようだ。ネコを不安定な姿勢で固定し，私の手につけた匂いを舐めさせると，十中八九まで眠ってしまった。

また，この習性のため病気になることもある。ご存知のようにネコの舌には無数の突起があって魚の肉などをはぎ取るようになっているので，舐めているうちに毛が脱け，腸の中で大きな毛玉になるのである。はなはだしい場合には死亡の原因にもなる。

とぼしい資料と研究

外国に比べて，日本にネコの専門書がないのは驚異に値する。ネコ党がいないわけではないが，外国ほど偏愛する傾向はないようである。

これはたぶん，家族制度に深い関係があると私はにらんでいる。成人した息子や娘が画然と別居する国では，ネコは恰好の老人の友だちになる。体力に見合った世話をしてやればいいし，イヌのように散歩をさせる必要もなく，それでいてこまやかな会話を交すことができる。しかも女性の方が平均寿命が長いので，ひとり寂しく暮らしながらネコを相手にするのである。

ババヌキの核家族化が進んでいるとはいえ，日本ではまだその点でウエットである。老人は若夫婦と同居し，孫の面倒をみたりしている。気違いじみたネコ愛好家が少ないのはそのせいであろう。

だからネコの本がないのには弱った。病気の診断についてさえ適当なものがない。相談を受けるが私にもわからず，思い余って犬猫病院に相談すると，

「弱りましたなあ，わかりませんなあ，あなたはズブの素人じゃないから，間に合わせの病名じゃダメだろうし，ま，ようすを見ましょうよ。ネコの病気についての研究は，日本は後進国ですから」

という答が返ってきた。

以来外国の本をあさり，目についた雑誌なども買い，家にネコを置くようになったが，ネコの動物学についてはまだよくわからぬ点が多い。また，ずいぶんと誤解されている点も多いようである。私は一時期ネコに夢中になり，資料を蒐め，仕事としてまとめるつもりだったが，自分で確かめ得ぬ点があまりにも多いので，ここ当分はネコが家から絶えることはないだろう。

忠実なのらネコ

俗に，〝イヌは人につき，ネコは家につく〟と言われているが，これなども信じられないようになってきた。ネコの識別能力は大変鋭く，人につかぬなどとはとんでもない話であった。

ただ，家に連れてこられる前歴により，差が激しいのが目立った。いわゆるのらネコをつかまえて2匹仕立ててみたが，一度野生化したネコは，子ネコから育てたものとはまったく違った。

のらネコの野性のすさまじさは想像以上である。家の出入口をすべてしめ，砂で便所を作り，傷だらけにならねば慣らすことはできない。まるでヤマネコを家に入れた感がある。

けれども，一旦慣れたらこれほど素晴らしいものも珍しい。人に対する反応が鮮烈であり送り迎えはするし，遠くへ行っていても名を呼んだだけでまっしぐらに駆けてくるし，どんなに好物であっても飼主が与えたものでなければ食べないようになった。いわゆる普通の飼いネコに，イヌの忠実度がミックスされた面白さがある。

これに比べれば，血統書などがついていてのらの経験がないネコは，動物としての能力が休眠している部分が多いのか，面白さは欠けるようである。これは，本来ソリタリーであるべき動物を，のっけから社会的に訓練して飼うせいであろう。

ゴロゴロは愛のサイン

子ネコから飼ったものでも，発情期だけは別らしく，反応が一段と鮮かになる。私は，長い間，ネコが喉をゴロゴロ鳴らす動物学的な意味を考えてきたが，今年の春，娘が変なことを始めた。

「マーチョ（マという名のシャムネコ）がふられてばっかりなの。デートへ行くけど，相手がそっぽを向いてるのよ」

とネコに同情した娘は，ネコの喉をくすぐり始めた。すると，果然，からだをすいよせ身も世もあらぬという風情になり，ゴロゴロが激しくなり，私の手で交尾動作を始めたのである。

娘は，

「ゴロゴロ反応というのよ。とにかくながあく（20分か30分）撫でていると，こうなってしまうの」

と説明してくれた。

他のネコでも追試ができた。喉のゴロゴロだけでも，さまざまな成長過程により，違った意味合いを持っている。ゴロゴロ反応はその1つとして，愛の信号にもなっているのである。

ネコについての観察と実験は，これからも続けていくつもりだが，ただ，ネコは1匹で生活をする動物だから，大量に数を飼えば意味がなくなるのが悩みである。■



ひなたぼっこをしながら顔ふきをするトラネコ

➡（前ページ下段より）

に置かれるのではない。2匹あるいは同様な関係にある数匹の雄ネコは，あたかも〝兄弟の関係〟にあるかのように，そろってその土地を支配する。そして交尾の時期といえども，かれらの戦いは，ある意味ではショーであって，決して命がけの真剣勝負にはなっていない，とライハウゼンはいっている。

だから，ふつう信じられているように，もっとも強い雄がその土地の暴君になって，求愛においても交尾においても他を制圧するなどということは，実はほとんどないのである。その理由の1つは，交尾においては，選択権はもっぱら雌の側にあるからである。雌はしばしば，もっとも強い雄やもっとも順位の高い雄でなく，もっと弱い，順位も低い雄に，長年の間交尾を許すことがあるという。

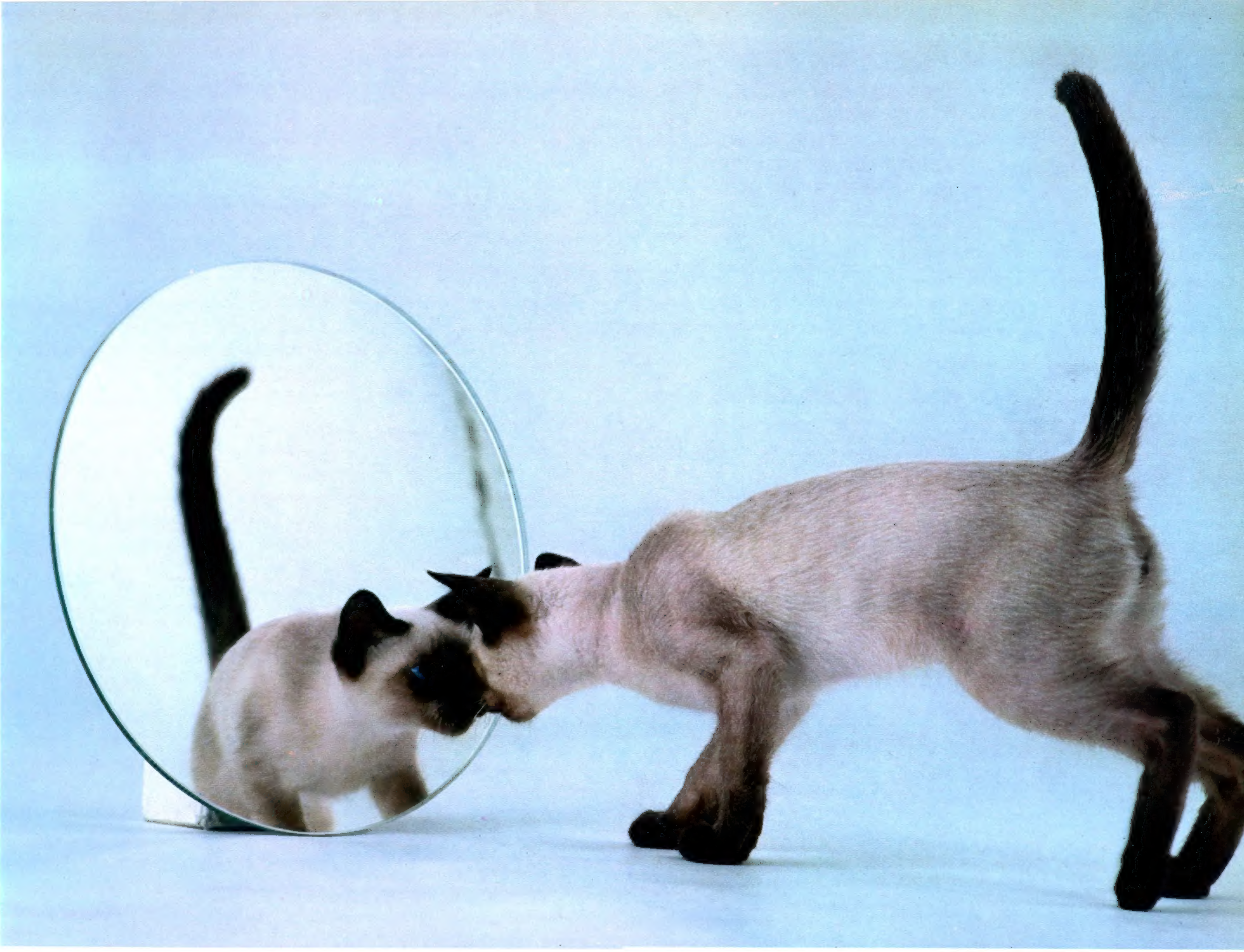
社交的な集会

日が暮れて暗くなると，ネコの雄・雌が何匹か一定の場所へやってきて，なんということなくそこにすわっていることがある。これはなんのためかまだよくわかっておらず，ライハウゼンも〝社交的な集会〟としか呼びようがないといっている。少なくとも，交尾期とは関係はない。ネコたちは，2～5メートルぐらいの間に比較的寄り集まっており，たがいに相手の毛をなめあっている。

声はほとんどたてないが，よく耳をすませてみると，たまには低くゴロゴロいっていることもある。1匹のネコが隣のネコにあまり近寄ると，寄られたほうは，耳を後ろに倒して相手を見つめるが，それ以外の点ではもの静かで，友好的な顔つきを変えない。

この〝集会〟は何時間か続くが，夜半ごろか，夜半すこし過ぎには，ネコたちはそれぞれの寝場所に帰っていき，会は，お開きとなる。

おそらくこの集まりは，近くにすむネコたちのあいだに，友好的で社交的なムード（生理的気分）を生じさせるものなのであろう。もちろん，ネコたちは狩りや闘争の場で，偶然的には顔をあわせているわけだが，野生のネコ族にもみられるように，このような〝社交的〟な集まりがやはり必要なのであろう。それは前にも述べたとおり，ネコは個体間の嫌悪感が強く，たがいに避けあうからだろう。逆にいえばネコが人間によくなつくのは，かれらが人間とは避けあったり衝突しあったりすることがなく，社交的・友好的関係のみを結ぶことができるので，人間というものが，ネコにとってきわめて強い社会的誘引力をもつかもしれない。■　（東京農工大教授）



ネコ科　ネコ属

イエネコ　*Felis catus*

「……だけど、うちの猫のダイナは見せてあげたいわ。ダイナを見さえすれば、きっと猫が好きになるわ。ダイナは実に可愛くておとなしいんだから」……「それにダイナは炉のわきで実に上品にすわって、足をながめたり顔を洗ったりしてのどをならしているんだもの――それに抱いてやると実にきれいでてざわりがよくて――それからネズミをとる技量ときたらすてき――」

（ルーイス・キャロル「不思議の国のアリス」岩崎民平訳より、角川文庫版）

ネコを愛する人は無数のアリスである。

ネコはイヌとともに、人間からもっとも愛されるペットとして、話し相手であるとともに、人生の道連れにもなっている。人間に飼われ始めた歴史は新しいが、ネズミをとる本来の使命に代わって、その美しさ、かわいらしさが人びとを引きつけ、ペットとしての地位をゆるぎないものにしたのである。

実際、愛猫家、愛犬家の数は多い。しかもかれらは、人種や階級、性別のいかんを問わず、いたるところにいるから、両者をくらべると人間界の新しい区分ができるほどである。

イヌ好きの人……男性的な性格で、英雄、豪傑、独裁者、軍人、政治家などに多い。

ネコ好きの人……女性的な性格で、画家、作家、音楽家などの芸術家が多い。

これらにはむろん例外があるにせよ、歴史を振り返ってみると、だいたい当たっているといえよう。

世のなかにネコほど本質的に自由である動物はおそらくいないだろう。人間はネコに対して羨望を感じるとともに、一方ではそうあり得ぬおのれの存在に落胆と安心を重ねてきたに違いない。そのためか、いつの世でも人間のネコへの態度には、賞賛と非難の両極端が、入りまじっている。

〝見かけと本心の違う偽善者！　ドロボウめ！　人の命令をきかぬやつ！〟とネコにあびせられる非難は枚挙にいとまがないほどである。しかし、これらは大部分がネコへの無理解や、イヌとの比較に基づく、人間につごうのよい批判であった。なるほど、イヌは主人に対してしっぽを振り、からだをゆすって恭順の意を示すが、ネコときたらだれに対してでも、つねに冷静で控えめだから、からだいっぱいの感情を期待しても、むしろ冷ややかに裏切られてしまう。

自由で誇り高きもの

ネコの性格は、3つの要素から成り立っている。個人主義と自尊心と孤独である。

ネコには人間に追従しようとする性格はないから、どんなに望んだところで芸当のひとつでもするわけではない。一方、ネコは自分でそうしたいと思ったときには、どんなにむ

………このネコぼくよりいいじゃないか。
シャムネコの子。この時代は、すべてが珍しくにおいをかいだり，さわったりして確かめ動くものにはじゃれつく。こうした子ネコのかわいらしさは，たとえようがないほどである。
撮影　菅野喜勝

ずかしいことや時間のかかることでもやってのける。たとえば、高いたなの上のミルク瓶からミルクを飲んだり、3、4時間も草やぶで鳥を待ち伏せてしとめることはなんでもない。

つごうのよい時間に出歩き、気に入った場所を見つけると1日じゅうでも寝ている。愛撫されたり、ものをもらっても、気が向かなければ知らん顔である。およそ、人間へのサービス精神などはもちあわせていない。

これらすべてがほんとうのことであっても、ネコをエゴイストと呼ぶのはかわいそうだ。それはネコなるもののもって生まれた気質なのだから。イヌにあいきょうがあるように、ライオンに威厳のあるように、動物本来のおかしがたい天性なのである。

人間はイヌに対して、人間の用途に適した実に多くのタイプ、たとえば、愛玩犬、狩猟犬、番犬、軍用犬、盲導犬などをつくることができたが、ネコに対しては、実用的なタイプをひとつとしてつくれず、せいぜい毛の長さや色は異なれ、大きさや形、重さの似かよった品種を改良し固定するのがやっとだった。

ネコは人になつくのではなく、その家にいつくのだといわれている。これはほぼ事実であって、自分の領土にきわめて強い執着を示した野生の時代のなごりであろう。

ネコは自分のすむ家の中や、庭、へい、立木のいたるところに尿をかけて、おのれのなわ張りを示すこともあるが、かといって、ふつうはこのなわ張りに他のネコが侵入しても排撃するわけではない。このへんは、実にネコの面目躍如たるものがあり、新しいネコがもらわれてきても争いなどはせず、平和的共存を楽しむ外交官ぶりを大いに発揮している。

交尾期になると、異性を求めて遠くへ家出し、飼い主を心配させるが、必ずといってよいほど、長い道のりを歩いて元気なようすのまま帰ってくる。傷だらけのことがあっても、たいしてやせているわけではない。放浪の期間中、自分でえさを捜し、適当に休息をとる術を知っているのである。夏の間、姿をくらまして森で生活し、冬になると、生まれた子どもを連れてもどる放蕩ネコもいるという。

ネコは実に身だしなみのよい、美しい動物だ。毛並みを整え、つやを出す毛づくろいはかれらの日課でもある。動きはネコ科の動物特有の柔軟さと敏捷さを誇る。そしてビロードのようなはだざわりのするからだを、音もなく運ぶ足どりはどこまでも軽やかである。

何か危険が迫ると、すばらしい跳躍で身をかわし、木やへいの上、家の中のたなから相手を小ばかにしたような顔で見おろしている。逃げ場がなければ、勇敢に反撃に転じる。こ



ヒョーッ、あまり驚かさないで！シャムネコの子。
ペットは、話しかけられるのを待っている。
かれらは人語こそしゃべれないが
鳴き声と身ぶりで答えてくれる。対話は
あなたのネコに名まえをつけることから始まる。
撮影　菅野喜勝

んなときのネコは，ある意味で最高の演技者であり，小さなライオンぶりをいかんなく発揮する。

敵の目前で両足をのばし，からだじゅうの毛をさか立て背を丸くふくらませ，フゥーッと相手に息を吹きかける。これは，敵に対して自分を実際よりも大きく見せ，威嚇しようとする策略である。らんらんと光る目は，相手をにらみすえ，つめは攻撃にそなえ，一分のすきもみせない。

いざ戦闘になっても実に強い。俊敏に動きまわって相手を傷だらけにして敗走させる。5，6匹のイヌを相手にしても勝つといわれるほどである。

戦いがすむと，おちついたようすですわりなおし，暴力ざたに終わったことを恥じるかのごとく，考えこんだようすでじっとしている。やがて，毛づくろいをして何ごともなかったかのように静かに歩き去っていく。

ウルトラCの運動感覚

ネコを持ちあげて空中から落とすと，4本の足でみごとに着地する。何度やっても同じであることを，多くの人が経験している。ネコがこのように完璧なスカイダイバーである秘密は，すぐれた平衡感覚の働きと柔軟なからだのおかげなのである。

泳ぎもじょうずだ。いつでも見られるというわけではないが，魚をとろうとしたり，おぼれかけた子ネコを救うために，雌ネコが水中にとびこんだりすることがある。

ネコは長距離を歩いたり，走ったりすることは不得手で，むしろ空間を跳んだり，はねたりすることのほうが天賦の才能にふさわしいようだ。

触覚，視覚，そして聴覚はいずれもよく発達しているが，嗅覚（きゅうかく）は一般に信じられているほど鋭敏ではない。

触覚はほおから横へぴんと張ったひげが代表器官である。かたくて弾力性のあるひげは，ネコが通り抜けようとする道の幅をはかったり，からだの左右の平衡感覚をささえている。

ネコの目ほど不思議なものはない。むかしから〝ネコの目のように変わる〟と非難めいた形容があるが，これは光の量の多少によって瞳孔（どうこう）が拡大縮小するのを言い表わしたもので，ネコの目をみれば時間がわかるなどといわれているくらいだ。ネコは夜行性だから，暗やみのなかでも不自由はしないが，まったく光がなければ目は見えず，耳とひげと鼻を最大限働かせることになる。

聴覚は視覚よりも発達している。毎秒2000サイクル以下の周波に感応するのは，人間と



あっ，あぶない！　大地にたたきつけられて……
心配ご無用。かれは動物界の忍者。このくらいは
朝めし前である。ネコはすぐれた平衡感覚により
高いところから落ちても，空中で反転し
四つ足で着地する。尾はバランスをとる舵だ。
PH. LANCEAU-JACANA



同じだが，６万サイクルの高周波でも聞きとることができるほどである。

ネコの知能については，あまり研究がされていないが，知能テストなどで有名なビネ教授〔A.Binet 1857—1911，フランスの心理学者〕がこんな実験をしている。

「ネコを鐘の形のガラス器に入れて，中の空気を抜くと，気圧の低下により，ネコは呼吸困難になるが，空気を再び入れると元気をとりもどす。もう一度これを繰り返すと，ネコは吸いあげポンプが作動したとたん，空気の吸いあげ口を足で押えて空気が抜かれるのを防ぎ，空気が送りこまれたのがわかると，その足をはずす。何度やっても結果は同じであった」という。

ネズミの不倶戴天の敵ではない

ネコがかわいいペットだからといって，肉食獣であることを忘れてはいけない。家の中では雑食に近いが，飼育状態を離れて野山へいけば，じょうぶなあごと歯を生かして肉食性の動物にもどる。

だからこそ，むかしから人間に飼われて穀物をネズミの害から防ぎ，人間の住むいたるところでその食糧を守り，役だってきた。実際，この点では同じ役目をしてきたイタチやジェネットにとって代わっただけの実力の持ち主である。

しかしたいせつなことが１つある。それはすべてのネコがネズミを捕獲するわけではないことだ。たとえばペルシャネコではそうした話は聞かない。これはあくまでも学習と訓練のたまものである。母親といっしょに生活した子ネコは，ネズミをとる方法を学習するが，生まれたばかりでもらわれてきた子ネコは，大きくなってもネズミのとり方をまったく知らない場合が多い。

ネズミをよくとるネコは１日に約20匹，１年では7000匹以上もとることになる。ネコはそのほかに，ウサギやニワトリのひな，鳥，魚などもつかまえて食べる。

つかまえた獲物をくわえて，飼い主の前に見せびらかすことがよくある。また半ば生きているものをなぶったり，じゃれたりしていることもあるが，これはネコの一種の遊戯であるといえよう。

雌ネコの不思議な生理

雌ネコは生後７～12か月で生殖可能になる。交尾期は一定しないが，春がいちばん多く，３，４日の間続く。この期間に交尾がなければ，その２，３週後に再び発情が始まる。

雌の鳴き声は，人間の子どもの泣き声に似た独特のもので，遠くまで響いて雄に合図をする。雄たちもまた，独特な声で応酬する。

おたがいに異性を意識すると，ふだんのもの静かなようすを捨てて，夜の間じゅう相手を求めてさまよう。こんなときは家の中の清潔な寝床にもどりもせず，地下の穴倉やほこりっぽい納屋や屋根が舞台になる。雌ネコは交尾期の間はすべての雄と交渉をもつことになるから，雄たちが先陣争いで猛烈な戦いを演じては，傷だらけになっている。

妊娠（にんにん）期間はおよそ56～69日間だが，１腹に何匹もの雄から同時期に多受精して，それぞれの雄の子どもを生むこともあ

シャムネコの母子。
シャムネコは，顔部，耳，四肢の先，尾部が暗色（カラーポイント）をしているのが特徴。それは，生まれたばかりの子どもにはないが３か月ほどたつとはっきりと色が出てくる。
PH. MARTINERIE–FOTOGRAM

りうるのである。〔注1〕

子どもは1匹ずつ袋にはいったまま生まれ，母親がそれを食い破り，子どもをなめてきれいにしてやる。あと産はすべて食べるが，こうすると乳の出がよくなるからだといわれる〔注2〕。子は成長するにしたがって，母親の声を聞き分け，いうことをきくようになる。

こうして子ネコは，生活のすべてが冒険と学習に終始する時期にはいる。動くものすべてに興味を示し，すぐじゃれついて，見ている人間を飽かせない。母親は遊びを利用して，からだのいろいろな使い方を教える。生きた小動物を追いかけさせたり，自分で殺した無傷の獲物で歯の使い方を練習させる。つめの使い方を覚えて木やふすまにいどみ，人をはらはらさせるのもこの時期である。

1年もたつとおとなになり，そのあと1年ごとに人間の5倍ずつ年をとっていく。寿命は平均10年である。

イエネコの起源と歴史

イエネコは1758年，リンネによって *Felis catus* と命名されたが，その起源についてはいろいろな説がある。しかし，今日ではリビアヤマネコのみを直系の祖先とし，すべてのイエネコがここに起源をもつと考えるのが通説とされている。

リビアヤマネコ *Felis libyca* は，アフリカ全土を中心に，アラビア，パレスチナからインド，トルキスタン，北は地中海まで分布し，それぞれの地方でカフルネコ，ヌビアネコなどと呼ばれている。からだは，大きめのイエネコと同じで，灰色がかった焦げ茶の短毛，毛並みは縞模様で黒い輪状の紋が尾についている。今でもイエネコと交雑し，生殖能力がある子が生まれる。

このネコは，はじめは，ナイル川上流の人びとが狩猟に使うため飼いならしたものだった。それをエジプト人が受け継ぎ，数世紀の努力の後，やっと現在見られるようなネコに仕上げたのであろう。

シャンクルキャット *Felis chaus* もまたイエネコにきわめて近い種としてあげることができる。この野生ネコは，中近東からインド，東南アジアにかけて広く分布していて，イエネコとのあいだに，生殖能力のある雑種をつくっている。アジアのイエネコには，このネコの血が混じっているといわれる。

マヌルネコ *Felis manul* は，長い間ペルシャネコの祖先だと信じられてきたが，今日では，この説は否定されている。確かに，このネコは他の野生ネコが短毛であるのに対し，長毛をもってはいるが，からだと顔の特徴がペルシャネコとは，まったく違っているのである。前臼歯（きゅうし）は2／2で，他のネコの3／2の歯式とは，明らかに異なる。



[illegible]ネコ[illegible]
[illegible]
[illegible]は野生ネコ[illegible]
[illegible]ある[illegible]45センチ[illegible]25センチ[illegible]
[illegible]



中央アジア，チベット，シベリア南部，中国南西部の草原にすんでいる

ヨーロッパヤマネコ *Felis sylvestris* も外観の類似にもかかわらず，ヨーロッパのイエネコの先祖ではない。この野生ネコは19世紀にはいっても，ヨーロッパの森で，ごくふつうに見かけられたが，イエネコのほうはローマ時代から飼いネコの地位を確立していて，数が少ないため高値で売買されていた事実があるので，祖先説をとる人はいない

ネコの起源については，有名なエピソードがある。ノアが方舟をつくって大洪水をのがれたとき，船内にネズミが繁殖して食糧を食い荒らした。困りはてたノアが，百獣の王ライオンに相談すると，ライオンは大きなくしゃみをした。するとライオンの鼻の穴から，2匹の小さなライオンがとびだして，たちまちネズミを退治してしまった。この小さなライオンが，最初のネコだというのである

ネコとヒトの文化史

人間とネコとのつきあいは，紀元前4000年までさかのぼると考えられている。他の動物たちが人間に飼いならされ，家畜となった時代にくらべるとはるかに新しいできごとである。事実，世界各地の先史時代の遺跡からは，人骨とともにウシ，ヤギ，イヌなど，家畜の骨が出土しているが，ネコの骨はまったく発見されていないし，洞窟壁画などにも描かれていない

ネコが歴史上，最初に登場するのは古代エジプトである。紀元前3000年ころの初期王朝の墓を飾るフレスコや壁画に，ネコの姿が見られる。第5王朝（紀元前2700年）のころには，ある程度飼いならされていたらしく，首輪をつけた絵が残っていて，第12王朝（紀元前2000年）の遺跡からは，ネコのミイラが30万体も発見され，エジプト人のネコに対する熱の入れ方をうかがわせている

紀元前450年にエジプトを訪れたヘロドトスは，ネコを殺した者は死刑にするという当地の風習を伝えている

またその400年後，シチリアのディオドロスは，エジプトでネコを殺したローマ軍の兵士が，怒り狂った民衆から石を投げつけられ，殺されてしまったという報告を残している

エジプト人のネコに対する感情は，宗教に近いもので，バスト神〔古代エジプトの愛の女神〕に仕える聖獣として礼拝し，ネコが死ぬと来世でも困らぬようにネズミを棺に入れて，とむらったほどで，家じゅうのものが喪に服するため，まゆをそりおとす風習まであったくらいである

このように，エジプト人はネコを聖獣とし

ジャングルキャット（ネコ科ネコ属）
別名ヌマネコ。体長60センチ，尾長12センチほど。インド，東南アジアに分布し，アジアのイエネコと近縁の種である。野生ネコ族の特徴になっている耳うらの黒い毛が伸びて，精悍さをそえている。
撮影　朝日新聞社出版写真部



て崇拝していたから，ネコの国外持ちだしは厳禁されていた。しかし，フェニキア〔地中海東岸の古代国家〕の商人たちは，ネコを密輸入しては暴利をむさぼっていた。エジプトのイエネコは，こうして小アジア，ついでヨーロッパへと渡っていったのである。

インドでも古い時代からネコが飼われていた。紀元前2000年ごろのサンスクリット文字にネコが登場しているほどである。インドの女たちは，たくわえた穀類をネズミから守るためにネコを飼った。なかでも，白いネコは夜に出歩くネズミを追いはらう意味から月の象徴とされ，敬われていた。

中国では紀元前1000年ころに，蚕のまゆをネズミから守るために，ネコがすでに飼われていたといわれ，孔子もネコを飼って非常に愛したという。しかし，一説ではネズミに仏教の教典を荒らされないように，インドのネコが教典とともに輸入されたとある。この説をとれば，中国でのネコの飼育は，少なくとも紀元1世紀に始まることになる。

イエネコが日本へ渡来した時期については，はっきりしないが，おそらく平安朝以後のことであろう。古くは"唐猫"と呼ばれていたことから，遣唐使の時代に仏典といっしょに中国からはいってきたと思われる。また，唐猫という名称は，在来のネコ（？）との区別を暗示するから，それからすると，もっと以前から"和猫"なるものがいたといえるかもしれない。

この当時のネコは，もっぱら，ネズミをとる習性が喜ばれ，きわめて実用的な動物として飼われていたので，古代ギリシャのように，イタチ科のジェネットがネズミ退治に飼育されていたところでは，ほとんど関心をもたれなかった。

一方，ローマ人たちはネコを愛し，シーザーの遠征はエジプトのネコをヨーロッパ全土，とくにイギリスへひろめる結果になった。ヨーロッパでは，ネズミ退治はイタチ科動物のフィッチの役目であったが，4世紀には，ネコがそれにとって代わった。

ヨーロッパの中世は，ネコにとっても暗黒の時代であった。あの魔女のイメージと結びつけられ，憎悪のはてに，無数のネコが火のなかに投げこまれた。

それは，ネコの夜に出歩くという習性が，魔女の集会と結びつけられ，また人になつかない性質や生活が誤解されたためであった。こうしてネコはネズミから穀類を守るという益獣から変化して，魔女の化身や使者として徹底的にきらわれ，殺されることになった。フランスでは，ルイ13世〔1601－1643〕の禁令が出るまで殺戮が続いていたほどである。

ネコについてのヨーロッパの迷信は，ほとんどがこの時代の産物であり，それらのいくつかは今でも根強く残っている。たとえば，黒ネコが目の前を横切れば，不幸の前ぶれと考えてきらう人が少なくない。この黒ネコは，中世でもっともきらわれていたが，古代エジプトであれば聖獣であったから，足もとをよぎれば，むしろ狂喜されていたことだろう。

ネコの迷信も，時代や地域が異なれば，このように，さまざまである。気象に関する迷信も多い。インドネシア人やマレー人たちは，ネコに水を浴びせると雨が降ると信じている。またイギリスの船乗りたちは，船出のときに乗せたネコが鳴くと，その航海はむずかしく，陽気で楽しげであれば，文字どおりの順風満帆だと思っている〔注3〕。海上では，ネコをなべの中に閉じこめると逆風で，海へ投げこむとあらしが起きるという。

他に，ネコが催眠力をもつと信じられたり，三毛ネコが火災や熱病から人を守るとか，殺せば七生たたるとかいう。

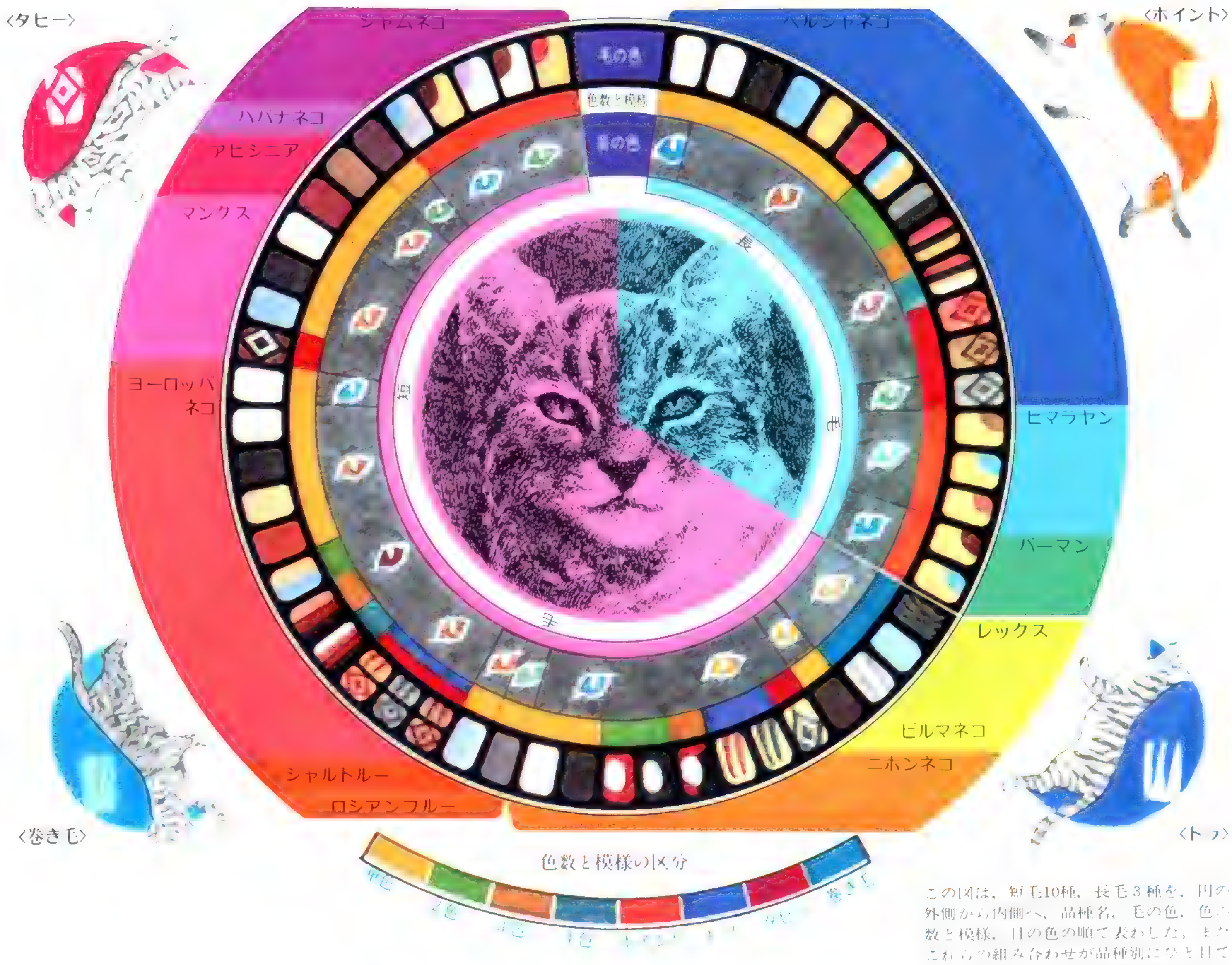
中国では，猫鬼として恐れられていたかと思うと，料理の材料としてネコの肥育が行なわれている。ビルマやタイではネコは神聖な生きものである。

日本では，平安朝末期に，しだいに庶民階級に飼育されるようになってから，2つの伝

花に埋もれた野生ネコ？　いいえ，
これはふつうのイエネコ。
写真は，ネコという動物が，今日まで形態上いかに
変化せずにきているかという1つの例である。
ネコは，《野性を残したペット》といえよう。
PH. RIZZINI



マヌルネコ　ネコ科ネコ属
野生ネコには珍しい長毛のため，ペルシャネコの
祖先だと思われてきたが，今では否定されている。
体長は60センチ，尾長は25センチで太い。
中国やモンゴリアに分布している。
PH. W. LUMMER



この図は、短毛10種、長毛3種を、円の外側から内側へ、品種名、毛の色、色の数と模様、目の色の順で表わした。また、これらの組み合わせが品種別にひと目でわかるようにした。外の絵は模様の図解

イラスト　貝原浩司

色でみるネコの品種

説が生まれた。1つは、年老いた雌ネコが化けて人を害するという説、いま1つは、ネコが品物をもってきて飼い主の恩に報いるという説である。

前者の説には、猫股と名づけられ、年老いた雌ネコが必ず登場し、尾がふた股に割れたのが特徴である。はじめは、あと足で立って踊ったり、ものをいったりするが、やがて人を食い殺して、その人に化けるといわれる。

化けネコは、江戸時代のお家騒動と結びついて、"鍋島の猫騒動"、"有馬の猫騒動"にみられるように、主人を殺された飼いネコが残虐な方法で、あだを討つという筋立ての怪談へと発展した。

文明の発展にともなう、人間社会のひろがりが、ネコを1つの国だけではなく、広く海を渡って世界各地へとひろげることになった。今では、極地地帯とアンデス山脈のもっとも高い高原地帯をのぞいて、人の住んでいるところには、どこででも必ずネコの姿を見かけるほどである。

ここに示した図は、イエネコの品種がもつ外形的特性についての1つの標準である。品種改良の結果、近い将来に新しい品種が登場する可能性は大きく、その点でこの図は永久に完結するものではないのだが……

イエネコの品種

ネコの合理的な飼育や繁殖、管理などが、最初に確立したのは19世紀後半のイギリスであった。1871年、ロンドンのクリスタルパレスで世界最初の品評会が開かれ、数百匹が出品された。それ以後、品評会は毎年行なわれ、ビクトリア女王の援助のもとにネコクラブが設立されるまでになった。イギリスのこうした例に刺激されて、アメリカやヨーロッパでもネコの飼育が盛んになり、いたるところで愛好家が集まりネコ協会が結成された。

ネコはイヌにくらべると、飼育の歴史が浅く、しかも家畜として人間に役だつ機能も少ないので、品種改良はあまりされてこなかった。イヌには、最小のチワワから最大のセントバーナードまでの大きさの違いや、ブルドッグやチンのような変形など、いろいろな形質と用途をもつ品種がある。しかし、ネコにはほとんど、からだの大きさや形に違いがなく、色こそ豊富だが、たいたいのところは古代からたいして変化していない。

新しい品種をつくりだし、固定しようとする努力は、主としてイギリスやアメリカの愛好家のあいだで行なわれている。

ネコの品種とは、1つの血統に属するネコが固定した特徴を示し、それらが遺伝形質として変わることなく子孫へ伝えられる場合、この血統に属するネコを1つの品種とするのである。そして、イギリスやアメリカのネコ協会は、新しい品種のもつさまざまな特性を列挙した"基準"を作成して、この品種のネコに対して、《基準》にある毛色や毛並みを守ることを要求している。

イエネコは多くの品種に分けられるが、生物学上の種としては先に述べたように、リンネの定めた *Felis catus* 1種で、長毛のネコも短毛のネコも、トラやライオンのように1つ1つの種ではなく、人間の手によってつくりだされたたんに1つの種のなかの変わり種、すなわち品種にすぎない。





21-10

白黒ネコ。いわゆる雑種。
白と黒がみごとに調和しているネコではあるが
この色や模様を固定化しないと品種とはいえない。
斜に構えて"仁義"を切っているかのような
このネコ，アフリカはコロンコロの産テス。(上)
撮影　岩合徳光

ニホンネコ。ニホンネコとは便宜的な名称で
ある固定した品種をさすのではない。
このネコは，ペルシャネコの血がはいった雑種。
雑種は，一般にからだが大きく
じょうぶで活動的である。(右)
撮影　菅野喜勝









21–14

ペルシャネコ。色の違った2つの目。
イギリス，アメリカでは，これを
オッドアイ(odd eye)と呼んでたいせつにする。
むかしは，かたわ者として相手にされなかったが
今ではたいへんな人気者である。(21–12)
PH. AARONS

ペルシャネコ。
ペルシャネコは，ネコのなかの貴族として愛され
多くの改良がなされてきた。
このネコのようなクリーム色のほかにも，ブルー
白，レッド，べっこう色などがある。(21–13)
PH. AARONS

ロシアンブルー。
北ヨーロッパ原産のネコで，起源は古いという。
体毛は，実になめらかで美しい。
ブルーとは体毛の色をさすが，その色は
写真のとおり，銀灰色といったほうが正確だ。(上)
撮影　菅野喜勝



ニホンネコ。ニホンネコのうち
黄色の地に赤や青黒い縞をもつネコを
トラネコとかキジネコと呼ぶ。
しかし，縞の模様は両者とも同じだから
学者は，トラネコと呼んで統一している。
撮影　菅野喜勝





ふつう品種と呼ぶ場合、これは農学上の単位として、栽培植物や家畜[illegible]、それぞれの種をその特[illegible]小さくする単位の名称である。品種改良[illegible]かさかんに使われたが、これは一度人間に飼われた家畜などを用途に応じ、その特徴をのばして人間がつくりあげるものなのである。

[illegible]ネコの品種もイヌの品種が400を越える[illegible]が予想される。[illegible]、種は生物の分類上の最小単位で、現在[illegible]の発見のないことがないかぎり、種が新[illegible]加えられることはない。

ネコの品種については長毛種と短毛種の大きな2つのグループに分けることが[illegible]ふつうの分類法であるので、次にこれらをみてみよう。

長毛種

一般的にいって長毛種のネコは温和で、おっとりしたところがあり、[illegible]その美しい姿をめでるために飼われることが多い。ネズミをとるといったネコ本来の特性を発揮することは少ない。

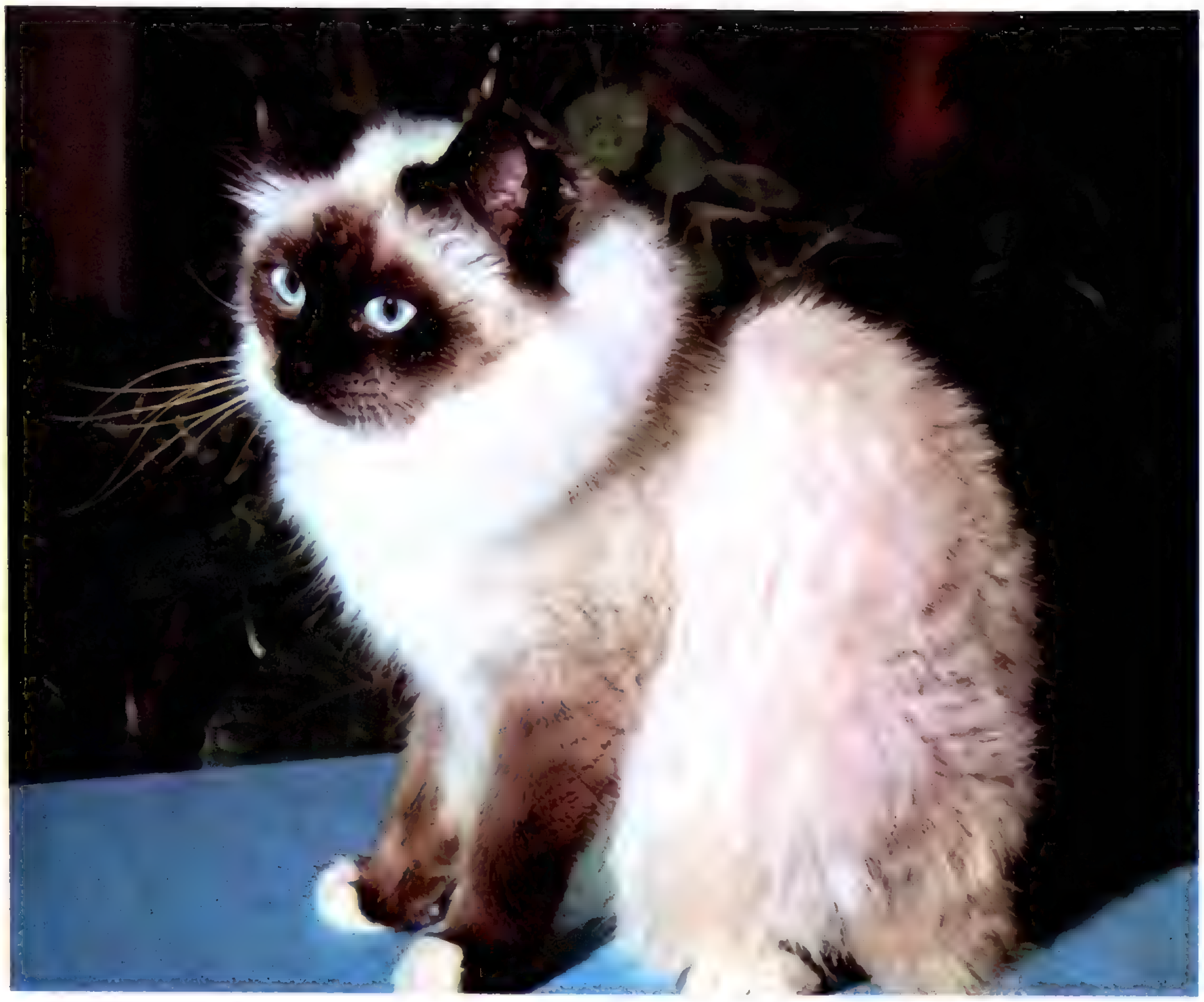
長毛は短毛に対して遺伝的に劣性で、長毛のネコと短毛のネコを交配すると、生まれてくる子ネコはほとんど短毛になってしまう。[illegible]完全に固定されてしまった[illegible]はともかく、突然変異であらわれた長毛のネコを改良し固定して現在のペルシャネコと呼ばれるものにするには、[illegible]の努力はたいていのものではなかったと想像される。

いずれも頭が幅広くて丸く、耳は小さく、鼻はひろがっていて、やや低く、からだは[illegible]、全体にずんぐりしているのが特徴だ。

代表的な長毛種のペルシャネコは、目の色や毛色の違いで、15のタイプに区別されている。最近改良された注目すべき品種は、[illegible]ネコの長毛[illegible]ネコのもつ[illegible]ポイント（耳、鼻、目、四肢[illegible]の先）[illegible]などの暗色）を移した、ヒマラヤンである。そのほか、[illegible]が長毛種にふくまれている。

ペルシャネコ

ペルシャネコがヨーロッパの人たちに知られるようになったのは、16世紀の終わりであ[illegible]。最初は、アンゴラネコと呼ばれていたが、この名はトルコの都市（現在のアンカラ）の名にちなんだもので、この時、[illegible]探検家でもあった、[illegible]



・ペーレスク〔Nicholas C. F. de Peiresc 1580－1637〕が長毛の美しいネコを見つけ，フランスへ持ち帰ったのが最初だとされている。ペルシャネコはネコのなかの貴族として，世界じゅうで愛されている。改良の結果，たくさんの毛色があり，厚く絹のようなはだざわりと光沢（こうたく）をしている。

このネコの特徴は，首の下のふさふさした毛が胸もとを飾っていること，大きい顔に大きい目，小さい耳と短い鼻すじ，平たい鼻をしていることなどである。脚（あし）は短く，全体にずんぐりした印象を受ける。

毛の色は，単色と多色に分けられる。単色では，黒，ブルー，赤，クリームなどの色がある。

そのうちもっとも人気があるのは，ブルーのペルシャネコで，イギリスでは1898年以来，1つの品種として認められている。このネコはアメリカ，フランスやドイツなどのヨーロッパ諸国，あるいはイギリス連邦諸国で，たいへんに愛されている。

ペルシャネコの目の色は，ふつうオレンジであるが，白いペルシャネコに青い目のものが出ることがある。原因は不明だが，これらのネコはからだが弱く，先天性のつんぼであることが長年の経験で知られている。また白いペルシャネコで，片目が青，片目がオレンジのものがあらわれることがある。これは金目銀目のネコとして珍重（ちんちょう）されているが，この場合もまた，青い目の側だけがつんぼであるといわれる。

多色のネコのうち，黒，焦げ茶，クリームの3色のとりあわせをもつ，いわゆる三毛ネコがある。三毛のペルシャは，ほとんどが雌で，雄はきわめて例外的で，生まれても生殖能力をもたない。したがって，三毛のペルシャを生ませるために，三毛の雌と単色の黒，焦げ茶，あるいはクリームの雄を交配（こうはい）させるが，どんな色の子ができるかは予測できない。そのためか，三毛のペルシャは珍種として喜ばれている。

チンチラとは，白い毛の先端だけが黒いネコで，からだ全体が銀色に光って見えるペルシャネコである。これを，世界でいちばん美しいネコだと賞賛する人は多い。

スモーキーと呼ばれる色をもつ，ペルシャネコがいる。これは，いぶしたような色，または灰色がかったもので，毛先が黒い点は，チンチラと同じだが，背中，頭，足の部分では黒みが強く，胸とわき腹，耳の毛のふさが白い。

そのほか，褐色（かっしょく），焦げ茶，銀色の地に黒の縞模様（しまもよう）（タビー）をもつネコもいる。しかし，ペルシャネコのタビーは，長毛のため短毛のそれのように対照があざやかではない。

ヒマラヤン

ヒマラヤンは，ネコの飼育家によってつくられた最近の品種である。イギリスで公式の品種として認められたのは，1955年のことではあるが，人気は増す一方である。

ネコの飼育家たちは，かなり前からくふうして，毛の長いシャムネコをつくりだそうと



バーマン（聖名，ビルマ聖猫）
長毛のからだに，独特のポイントが出ている。しかし最大の特徴は，足先が白いことである。ビルマの伝説では，祖国の危機を憂いて死んだ老僧に代わり，このネコが国を救ったという。（上）
PIERUZZINI

ヒマラヤン
イギリス，アメリカでは，カラーポイントと呼ぶ。シャムネコのもつ美しい色を，ペルシャネコの長毛に移した改良種。その名はチンチラネコと同様ウサギの種名から転用したもの。（下）
PIERUZZINI

ミケネコ
黒と茶と白の3色が，このように集まっているのをべっこうネコと呼んでいる。また，同じ3色でも，白がまだらになっていればそのネコを，三毛ネコという。（右）
PIERUZZINI

努めてきたが、結果は、必ずしも満足のいくものではなかった。

しかし、かれらはあきらめずに、その新しいネコを良質のペルシャネコと何度も交配させることによって、とうとう、シャムネコの色をペルシャネコのからだに移すことができた。これがヒマラヤンである。最初の成功者はアメリカの婦人であったという。しかし、依然として、からだの大きさと目の色に多くの難点が残っている。

その完成型は、ペルシャネコのように大きくて、丸く、クリーム色の地に、シャムネコのもつ暗色が、からだの突端部にカラーポイントとしてあざやかにでて、目はサファイヤのようなブルーが要求される。

バーマン

このネコは、ビルマ聖猫(せいびょう)ともいわれている。ヒマラヤンによく似ているが、少数のため、希少価値(きしょうかち)がある。からだの色が青みがかったものと褐色(かっしょく)の強いものの、2種類が知られている。色の配置は、シャムネコに似て頭、四肢（しし）、尾に暗色がでる。最大の特徴は、四肢の先端が白くきわだっていることである。目の色は青。

ある伝説によれば、むかし、お釈迦(しゃか)さまが生まれるよりも前のこと、インドシナ半島のとある山中に、ひとりの年老いた僧侶(そうりょ)が住んでいた。この人は1匹の白ネコを飼っていたが、自分の死期の近いことを感じて、サファイアの目をした黄金(おうごん)像の足もとに身を横たえ、静かにその時のくるのを待った。

すると、白ネコが近づいて、僧侶の頭に乗った。主人が死ぬと、その魂はネコに乗り移り、ネコの毛は、像のように黄金(こがね)色に変わり目もサファイアのように青くなった。しかし、飼い主の頭に触れていた足の先だけはもとのまま、白く残ってしまったという。

これは、バーマンのからだの色の特徴を伝える、おもしろい話だが、このネコがヨーロッパに移され、1つの品種として認められたのは、今世紀のことである。

1916年、イギリス陸軍の兵士であった、ゴードン・ラッセルは、当時イギリス領であったビルマの、一地方の反乱を鎮圧(ちんあつ)に出かけたおり、多くの僧侶をチベットに避難(ひなん)させた。

かれらは、寺院の大きな地下室で、自分たちの魂が宿っていると信じている白ネコを飼い、これを敬(うやま)っていた。反乱がおさまりラッセルも僧侶たちも、ビルマへもどったが、3年後、かれがフランスへ移住するため、ビルマを離れるとき、僧侶たちは、この聖なるネコの雌雄を、感謝のしるしとして贈った。

これが契機となってヨーロッパへはいったバーマンは、正式の品種として、まずフランスで、次いでイギリスでも認められるようになったのである。

短毛種

短毛のネコはもっとも種類が多く、長毛種にくらべると、活発で人なつこい性質である。世界じゅうのいたるところで見かけることができるが、その代表品種は、なんといってもシャムネコである。そのほか、ハバナネコ、ヨーロッパネコ、シャルトルー、ロシアンブ



…、ペルシア、マンクス、シャムネコなどが、このグループに属している。

そのほか分類上は、短毛種にはいっているが、長毛と短毛に対して、ちぢれタイプといえるような巻き毛のレックスがいる。さらに、ほとんど見る機会がないが、全身に毛のない、ゴルトーツのような表皮をもった、メキシコ無毛ネコ、または、…アレストリートが1940年代に改良品種として固定されたようだが、そのからだの色や目など、くわしいことは、わかっていない。

ヨーロッパネコ

ヨーロッパネコという場合、二つの意味がある。1つは、ヨーロッパのネコ、すなわちヨーロッパのいたるところで見かけるネコをさす。日本ネコという場合は、現在のところ、これと同じ使い方である。一方では、飼育家が改良し、固定した純粋のヨーロッパネコといわれるものをさす場合にも使う。また、この純粋種に、シャルトルー、マンクス、ロシアンブルーという品種もふくめて、分類上、ヨーロッパ系のネコの総称として使う場合もある。

ヨーロッパのネコは、短毛が細く密生し、からだは大きく、胸部はひろがって、骨格が太い。耳は左右に離れ、目はまるく、ほおはふっくらとして、短く平らな鼻がついている。四肢はしっかりとしまして、足もとは丸い。しっぽはつけ根で太く、先細りになっている。このネコはどこでも見られる、ふつうのネコである。

一方純粋のヨーロッパネコは、飼育家たちが苦心のすえにつくりだしたものである。単色、三毛、タビー、とら模様の各種がある。

白ネコは、ふつう色素の欠乏によってできる白子ではなく、ペルシャネコと同じように、青い目のネコはりんぱである。黒ネコは、混じりけのないオレンジの目と、すんだ黒い体毛をしている。純粋品種でない黒ネコが、緑色をした目をもっているのと対照的である。

タビーのネコは褐色、または銀色の地に黒い縞、あるいは、焦げ茶にくり色の縞がある。目の色は、いずれもオレンジ色である。

シャルトルー

このネコは南アフリカが起源といわれ、フランスで改良された品種である。大きいからだをしていて、じょうぶである。鼻づらは短く耳は大きい。体毛はむらのない単色で、かつては黒ずんだねずみ色、またはプラムのような色をしていたが、飼育家たちの努力によって、みごとな薄紫色に変わっている。目の色は、からだの色に調和した琥珀色である。

ロシアンブルー

ロシアンブルーは、19世紀の末に、ノルウェーからフランスへ持ちこまれたネコである。かなり古い品種だが、その起源はよくわからない。北ヨーロッパが発祥の地であるともいわれ、ロシア皇帝に飼われていたという。

からだつきはすらりとして、短く密生した毛は、つやがあって、色はブルーというよりは、むしろグレーに近い。やや胴長だが、動きはしなやかで、へびのようにうねうねした感じがする。

このネコは、シャルトルーなどとよく似ているが、目の色が緑色なことと、くさび形の頭部をしていることで区別できる。フランスでは、アメリカンとか、マルタ島ネコとも呼ばれている。

マンクス

このネコの最大の特徴は、毛がないことである。丈は低いが、後肢（こうし）が長いた



…18世紀中ごろから…アフリカが起源とか、…といわれている。

PH. BUZZINI

撮影…

PH. PRENZEL PRESS

21－20

め尻がもちあがった形をしている。だから、ウサギのようにピョンピョンとはねて走りまわっている。

頭は大きく丸く、鼻づらはやや出ている。しかしほおがふくらんでいるために、その鼻は実際より低くみえる。耳はつけ根がひろがっているが、先端は鋭くとがっている。からだの色は、白、黒、青、茶の単色のほかに、タビーや三毛もある。目はオレンジ色をしている。

尾のないネコはマンクスだけではなく、日本やマレヤにも見られるが、品種として固定されたものではない。マンクスは品評会などでは尾が完全にないものが要求されるだけでなく、尾のつけ根に一種の陥没があることまで要求されるという。

マンクスの起源についてはなぞが多い。一説によると、スペインの無敵艦隊がイギリス海軍に敗れて難破し、船内の尾のないネコが、イギリスのマン島に漂着したというのだが、スペインに尾のないネコはいなかったので、





この説は怪しい。また、この艦隊はバルチック艦隊であるともいわれる。ウェールズ〔イギリスのグレート・ブリテン島の西部半島部〕の伝説に、アイルランドからマン島に渡ったという説もあるが、いずれも信憑性は薄い。

しかし、比較的有力なのは、安南〔現在のベトナム〕にいた尾の短いネコが、このマンクスと関係があって、東洋と交易のあった貿易船がこのネコをマン島に運んだという説である。

マンクスについては、ノアの方舟にまつわる伝説がある。あるネコがノアを驚かせようとしてネズミをとるあまり、舟に乗り遅れそうになった。あわてて乗ったとたん、ノアが入り口の戸をしめたため、尾がはさまってちぎれてしまった。このネコの子孫がマンクスなのだというのである。

アビシニア

アビシニアは、鶸色、または焦げ茶色の体毛で、毛の末端には二重、三重の黒、または暗色の縞があって、霜降り模様になっている。からだはかなり小さいが、表情豊かな大きい目と耳をもち、頭は細長い。

古代エジプトのネコに、もっともよく似ているといわれ、すらりとした容姿を誇っている。目の色は緑で、焦げ茶または黄みがかっているものがある。

100年以上も前に、アビシニア〔エチオピアの異名〕からイギリスに運ばれ、1883年のクリスタルパレスの品評会以来、人気を博している。

シャムネコ

ネコのうちでは、ペルシャネコとならんでもっとも有名なネコである。すらりとしたからだは明るい色で、顔、耳、四肢（しし）、尾などの突端部が暗色を帯びているのが特徴だ。その暗色には何種類かあって、ブルーポイント、シールポイント、チョコレートポイント、ライラックポイントなどと呼ばれている。目の色はいずれも、サファイアブルーである。

シャムネコの行動はちょっとイヌに似ている。活発で人づきあいがよく、ひもでつないで散歩に連れていくこともできる。このネコに難点があるとすれば、それは声である。しわがれた、人の叫びにも似た声で、交尾期などに、このネコの騒々しい交歓に悩まされた人も多いはずだ。

起源はクレオパトラの時代までさかのぼる。古代の穀物貿易の際、船内のネズミ退治に持ちこまれたエジプトのイエネコが、シャム〔現



アビシニアは古い品種で、その名は
アビシニア（現在のエチオピア）から
輸入されたことに由来する。
頭がよく、活動的で人なつこい。
古代エジプトのネコによく似ているという。
PIC BUZZINI







ミケネコ　いわゆる三毛ネコ
日本が世界に誇ってよいネコである。
日本ばかりでなく、イギリス、アメリカでは目をつけて
品種としての固定化が進んでいるのは望
ましいことだ。おとなしくしとやかなのが特徴。
撮影　菅野嘉時

バーミーズ
ビルマの原産ネコ。アメリカへ輸入され
シャムネコとの交配の結果、改良されたもの。
ビルマでは、神につかえるものとして
たいせつにされている。バーマンとは別品種。
PH. BEZZINI



在のタイ）に運ばれ、その土地の野生ネコと交雑したのち、シャムの王宮の奥深く隔離されて固定したと考えられている。

シャムの王宮には数百匹のシャムネコが飼われていて、外国の賓客への贈り物として王室から下賜されるならわしがあり、これらのネコが時代と人の手を経てアメリカに渡り、品種改良にみがきがかけられた結果、現在のような世界的な品種として、広く飼われるようになった。

ハバナネコ

この品種はごく最近、シャムネコから改良されたもので、1957年、パリの品評会にはじめて姿を現わし、注目を集めたネコである。

名まえのとおり、葉巻きの色（ハバナブラウン）をしていて、ビルマネコに似ているが、からだつきはすらりとしている。毛並みには、まったくむらがない。目の色は緑である。

ビルマネコ

このネコの体毛には2種類あって、黒みがかった色のものはビルマ黒ネコ、青みがかったものはビルマ青ネコと名づけられている。いずれも非常に暖かい感じのする毛が、からだを包んでいる。胸部と腹部では、色調がいくらか明るくなっている。後肢（こうし）は前肢より長めである。

1930年のこと、1匹の全身褐色の雌ネコがビルマから北アメリカに輸入された。このネコに雄のシャムネコの交配を重ね、固定していったものが今日のビルマネコである。イギリスへは1947年に輸入されている。

古代エジプトのネコと同じように、ビルマでは仏に仕えるネコとして寺院でたいせつに飼われ、聖なる宝物の守り神とされていたという。

ニホンネコ

いずれも短毛であるが、どの系統のネコがどのような経路を通って、日本にはいってきたかという点は記録がなくわからない。事実、日本語でいう〈ネコ〉なることばの起源も諸説が入り乱れていて定説はないほどである。

日本人は、むかしネコのことを《ネコマ》と呼んでいたが、それは、《ネ》はネズミ、《コマ》は好む、から転したとされる。また一説には、《寝るを好む》から《ネコマ》、さらにつまって《ネコ》と呼ぶようになった、ともいわれている。

からだの色は、黒、白、黒と白のぶち、あるいは黒と茶のとら模様、黒、焦げ茶、白の三毛など、さまざまであるが、大きさや形に違いはない。

日本では、ネコの品種を固定して、いわゆるニホンネコとしての基準をつくろうとする努力がなされておらず、長い間野放しにされたまま繁殖してきた。だから、正確にはニホンネコという品種はないといってもよい。近年、むしろ外国で日本のネコのおとなしい性質やじょうぶで飼いやすい点が注目され、品種を固定しようとする動きが非常に盛んになり、三毛ネコやトラネコが輸出されているくらいである。

レックス

波状の毛並みをもち、おだやかな性質の美しいネコである。ごく最近まで、長毛短毛の差こそあれ、ネコの毛並みは両方とも直毛でなめらかであったが、1950年代に、イギリスのイエネコから、黒く、しかもカールした毛のネコが、突然変異で生まれたのがはじめてである。盛りあがった鼻づらも特徴といえる。

体毛は、すべてカールして波状になり、柔らかである。この特徴は遺伝的に優性で、どんな毛のネコと交配しても、波状の毛になる。だから、白、クリーム、黒、タビーなどと豊富な色と模様を誇っている。

長毛種や短毛種とは別のタイプで
両者に対して、遺伝的に優性である
イギリスで生まれた突然変異を固定したものだが

三毛ネコの遺伝

田島弥太郎
（国立遺伝学研究所形質遺伝部長）

ネコの遺伝のなかでむかしから人の注意をひいてきた問題に三毛ネコがある。三毛はほとんどが雌で、雄はきわめてまれにしか生まれない。このことがとくに愛猫家の注意をひくところとなった。1900年に科学としての遺伝学が誕生して以来、遺伝学者はこのなぞを解こうと努力した

その結果いろいろな仮説が提唱されたが、なかでも多くの学者の支持を得たのは、三毛は、茶色を現わす遺伝子と黒を現わす遺伝子とが1個ずつ存在する場合であり、しかもこの両者が性染色体の上に乗っかっていて伴性遺伝（人間の色盲と同じように性別によって現われ方が異なる遺伝）をするために雄が生まれてこないという説である。

この説明で三毛の疑問は解決されたかにみえたが問題はそう簡単ではない。ごくまれに三毛の雄があらわれてくる。しかも三毛雄の大部分が生殖能力を欠いている。これを説明できなければ問題は解決したとはいえない。幸い駒井卓博士（京大名誉教授）が精力的に研究を進められたので、長い間なぞに包まれていた問題もみごとに解決がついた。

ネコの毛色の遺伝

三毛の遺伝を理解するにはまずネコの毛色の遺伝について、あらましを知っておく必要がある。

ネコの毛色には全白、全黒、全茶、虎斑（とらふ）（雉（きじ））、有色と白斑の組み合わさったもの、三毛、シャムネコに見られるような耳、鼻、肢端および尾が黒く、他は白茶色を呈するもの、灰色などさまざまなものがある。このうち全白はあらゆる着色に対し遺伝的に優性であり、また全黒のなかには優性を示すものもある

三毛は黒、茶、白のまだらで、白斑のない場合はべっこう色と呼ばれる。三毛の遺伝の特徴としてむかしから問題にされてきた点は、三色が混じっている場合でもべっこう色の場合でも変わりないので、ここでは白斑の有無は一応伏せておいて、両者をともに三毛として扱うことにする。また黒の代わりに虎斑がはいった雉、茶、白という場合もある。

三毛を構成する黒、雉、茶などはいずれも1対の遺伝子に原因する性質であることがわかっている。両親とも黒なら子はみんな黒、両親とも茶なら子はみんな茶であるが、黒の母と茶の父の組み合わせからは三毛の雌と黒の雄が生まれ、茶の母と黒の父からは三毛の雌と茶の雄が生まれる。このことから黒と茶は伴性の対立形質で、黒遺伝子と茶遺伝子が1個ずつ存在すると三毛が現われると考えられた。この場合、白色部ができる原因については学者により意見が分かれ、白は黒や茶が全体にひろがらぬために生ずるもので、黒や茶以外に特別の遺伝子を仮定する必要はないという考えと、特別の遺伝子の仮定を必要だとする意見とがある。

三島市でのネコ調査

ところで実際に飼われているネコの毛色はどんな割合になっているだろうか。駒井博士が静岡県三島市の飼いネコ300頭について調査した結果は次の表のとおりであった。

毛色／性	白	茶	黒	雉	黒三毛	雉三毛	計
雌	5	30	38	27	58	24	182
雄	4	43	40	31	0	0	118

このうち白は三毛に関係がないのでのぞく。調査の結果は従来知られていたように三毛は雌ばかりで、雄は1匹も見当たらなかった。黒は雌雄ほぼ同数であるが、茶は雄のほうがはるかに多くなっている。茶に雄が多いことは日本の古い文献にも記され、またロンドンのネコの調査でも確かめられている。このことから「伴性遺伝をするのは茶だけで、黒のほうは普通遺伝をするのではないか」と駒井博士は指摘した（1946年）。

今までの説明では茶も黒も伴性遺伝をすると考えていたのに対し、駒井博士は茶だけが伴性遺伝をすると考えたわけである。*

これによって、従来提唱されたどの学説よりもはるかに合理的に、三毛の遺伝を理解することができるようになった

三毛雄がまれに出現する理由

しかし、上の説明だけではどうして三毛雄が生まれてくるかを説明できない。駒井博士の、三島市での猫口調査では三毛雄は見つからなかったが、博士はその後根気よく三毛雄の例を集めて、1956年までに三毛雄にまちがいないと思われるもの65例を集めることができたという。

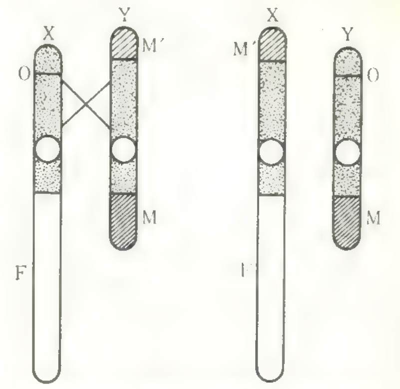
三毛雄は出現がまれなうえに、たまに出現してもそのほとんどが生殖能力を欠く。このことは1914年にドンカスターという学者がはじめて報告して以来多数の人の注意をひき、三毛雄のまれな出現とともに種々論議されてきた。おもな学説をあげてみると、次のようなものがある。

1. 伴性遺伝子が性染色体Xから離れて、伴性遺伝をしなくなるというもの。これは後に2本の性染色体XY間に遺伝子交叉が起こって毛色遺伝子が性染色体Yに移るという考え方に訂正された。
2. 性染色体が部分的に不分離を起こすという説。
3. 三毛雄は本来茶雄または黒雄であるが、これに変更遺伝子が作用して三毛があらわれるという説。
4. 間性説で、三毛雄は高度に雄化した雌であるというもの。間性が生ずる原因としては遺伝的とするものと、ウシのフリーマーチン（母の子宮内で胎児の発育中に雌、雄胎児のあいだに血管を通してホルモンの交流が起こり間性となるもの）のようにホルモンの異常によるとするものとがあげられている。

三毛雄と生殖能力

これらの説のうち3は三毛雄が生殖力を欠く点を説明できない。4についてはフリーマーチンの確証は得られていない。2は2個のX染色体の不分離によって1本のX染色体上に茶と黒の2つの遺伝子が存在するようになるという説であるが、黒が普通染色体にあることがわかった今日では明らかに誤りである。**

現在もっとも確かと考えられる学説は1に掲げたXY交叉説である。駒井博士はこの考えをいっそう発展させて、新しい機構を提案している。***



X染色体とY染色体の交叉によって三毛の雄が生ずることを示す（駒井博士、1956）O＝茶遺伝子、F＝雌遺伝子、M＝雄遺伝子、M′＝雄の生殖力を支配する遺伝子 X、Y間にX印のところで交叉が起こると（図の左）XにあったOがYに移り、反対にYにあったM′がXに移る。（図の右）

三毛雄の精巣をとって細胞組織学的に調べてみると、たいていの場合、生殖細胞の発達が抑圧された状態にとどまっていて、とうてい生殖能力をもつとは考えられないが、なかには生殖細胞がよく発達していて、生殖能力をもつと判断されるものがあることを石原隆昭博士は報告している。石原博士の場合は6例中2例このような場合が観察されたのであるが、この2匹のネコは繁殖期には雌に関心を示して追いかけ、1匹は雌と交尾するのが見られたという。このほか広島大学の橋岡信一教授の家で飼っていた三毛雄は隣家の三毛雌と交わって茶雌2匹、三毛雌1匹、三毛雄1匹の子の親となったということを駒井博士は報告している。

このような例からみても三毛の雄は全部生殖能力を欠いているわけではなく、生殖能力に関してはいろいろの程度のものがあることがわかる。このことは上述のXY交叉説で十分説明できるところで、この考えの正しさを示している

解説の注

* 遺伝式を使って説明すると次のようになる

茶雌　$O/O\ b/b$（またはb/b^+, b^+/b^+）
黒雌　$O^+/O^+\ b/b$
雉雌　$O^+/O^+\ b^+/b^+$（またはb/b^+）
三毛雌
　黒三毛　$O/O^+\ b/b$
　雉三毛　$O/O^+\ b/b^+$（またはb^+/b^+）
茶雄　Ob/b（またはb/b^+, b^+/b^+）
黒雄　O^+b/b
雉雄　O^+b^+/b^+（またはb/b^+）

——→ *

カラーページ注

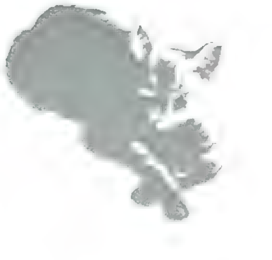
〔注1〕 **ネコの繁殖生理**　ネコは他の動物と違って、交尾の刺激によって排卵し受胎する。ふつうこの刺激ののち約24時間後に排卵するといわれ、排卵される卵子は4個ないし5個である。このような排卵の機構なので、数頭の雄と短時間のうちに連続的に交尾すれば、多受精の現象が起こり、一度に生まれる子どもたちの父親が複数となることもあり得るのである。

〔注2〕 **あと産（胎盤）**　これには乳の出をよくするホルモンが大量にふくまれているので、母獣に食べさせなければいけないといわれるが、実際には食べさせなくても、乳の出には関係ない。胎盤は動物にとっては良質のたんぱく性食物なので、おそらくネコの野生時代には、哺乳や子どもの世話などの忙しい時期に、栄養食の意味が強かったのであろう。

〔注3〕 **船霊様（ふなだまさま）**　日本でも雄の三毛ネコは、むかしから船の守り本尊として船霊様と呼ばれ、航海の安全を守るものとして、また暴風雨を予知する能力のあるものとして、珍重されていた。最近でも、南極観測隊に航海の安全を祈って、雄の三毛ネコを寄贈した人の話もある。■

（小寺重孝）

客間の虎





大佛次郎

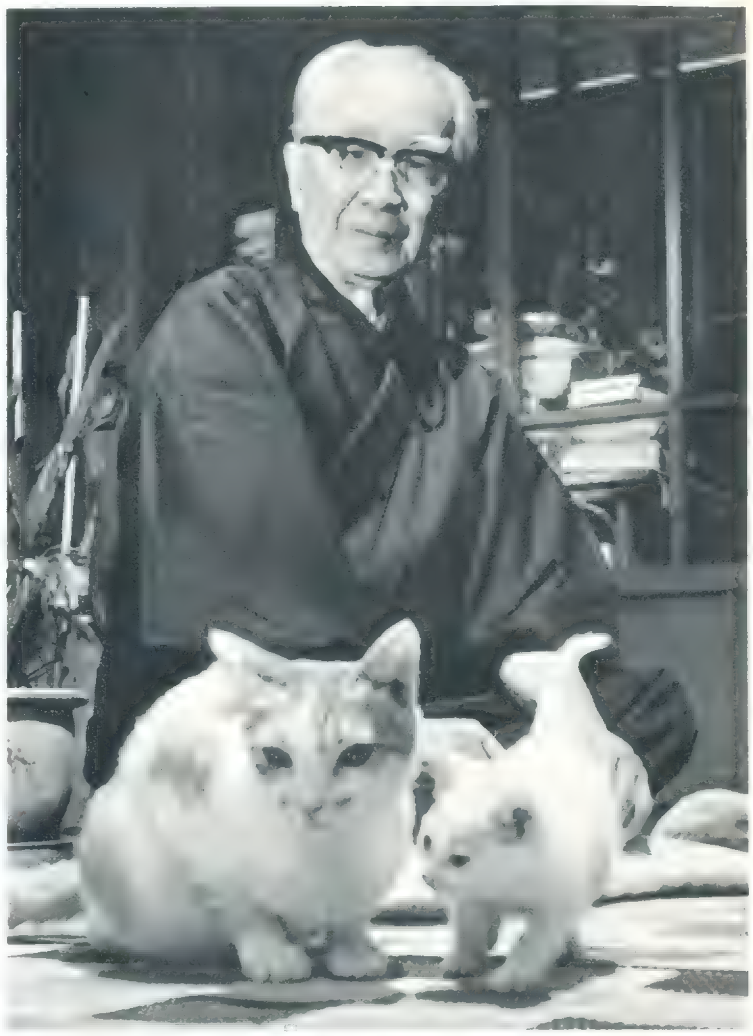
猫を，ヨーロッパの都会人文化人の一部では，客間の虎と形容して讃美した。銀灰色で，毛のふさふさと長いチンチラ猫など，サロンの絹椅子に，ながながと寝そべって，青い瞳を燐光のように光らしているのを見たら，豪奢な姿が，独り居て虎のようにおごそかで立派であろう。近頃は日本でも，贅沢な品種のシャム猫，ペルシャ猫など飼う人がふえたようだが，それでも犬の愛好者にくらべてはすくない。猫は犬よりも気位が高く，孤独で，人を拒絶する気質があるから，理解のあるよい飼主にめぐり会うことが，すくない。猫の方でも，別にそのことを歎いてはいない。何もパリやロンドンの猫のように，世紀末的な客間のアクセサリーになる必要を感じない。私を，そっとして，ほっといてください，と言うのが元来，猫の真言なのである。

おしなべて，日本の猫は，都会的社交的であるよりも，田舎猫で，住む家に附属して，箱入り娘の気質であまり外へ出たがらない。外国種のシャム猫などは，その正反対で，家につかず，人に，特にその中の誰かひとりに馴染んで，他の家人さえ無視する性質があるが，日本の猫は，「家猫」と言われるくらいに，人間よりも家になついている。だから，引越の多い都会人の生活には向かず，猫らしい猫は，田舎の家に住みついたものに見かけられる。

猫が家についている性格は，飼主が引越して，よそに移った時にあらわれる。よほど途中も注意してバスケットに入れて連れて行っても，猫は引越嫌いで，別の家のにおいが我慢できないと見え，飛び出して，もとの家へ帰ろうと始めるのだ。しばらく柱につないで置いても，放してやると，いつの間にか逃げている。もとの家が，すぐ見つかる近い場所にあればよいが，遠くてわからないと，猫は新しい家へも古い家へも帰れないで，道を失って行方不明となる。

私の家にいたトンベエと言う名の虎猫がそれであった。同じ市内でも2キロばかり遠い距離を引越したのだが，現在の私の家から姿を見せなくなったので，探しにやると，空屋となったもとの家に帰っていた。連れて戻ると，また逃げて帰った。同じことをくりかえして，食物も貰えない場所にどうして帰って行くのかと不思議に思っていると，4,5度目の家出に，もとの家の襖や障子を爪を立ててさんざんに破って，どこへ行ったのか，姿を見せなくなった。身についた癖とは言いながら，なんとも哀れで，その後も見にやったが，ついに行方不明になった。

人にやった猫が，小さい時分ならば心配はないが，相当大きく成ってから，よそへやったのは，きまって，ひとりで帰って来て仕舞うか，途中行方知れずになる。先方へ着いたら，半日ぐらい戸棚の中にでも閉じこめて，家のにおいに鼻が



「20匹以上はいますよ　正確には，さあー，何匹になりますかね　と語る大佛次郎氏
月並みな名のクマ，アカからマタベー，ヒデキ，コジロー……まで，すべて雑種である

---

* ──────→

ここにOは茶，O^+ は茶でない性質，bは黒，b^+ は雄遺伝子をあらわすものとする。これらのうちOと O^+ はX染色体の上に存在し（したがって伴性遺伝をする），bと b^+ は普通染色体の上に存在すると考える。

雌はXX，雄はXYであるから茶ネコの場合を例にとると雌は O/O，雄はOである。一方黒と雄とはたがいに対立する遺伝子であるから，どのネコも必ずbか b^+ をもつ。そしてOはbや b^+ に対し優先的に働くから雌では O/O，雄ではOが黒や雄の作用をおさえて茶をあらわす。

これに対し O/O^+ の場合（これをヘテロの状態という）には茶も，茶でない性質もあらわれるが，この場合，共存する遺伝子が b/b ならば，非茶部は黒で黒三毛が，b/b^+ または b^+/b^+ ならば非茶部は雄で雄三毛があらわれてくる。

** ヒトやハツカネズミについて，Y染色体に雄遺伝子があることが明らかになった今日では，性染色体不分離説は別の角度から見なおされてよいかもしれない。

*** 駒井博士は，前ページの図に示したような機構を提案した。すなわち茶遺伝子Oは本来X染色体上に存在しているが，まれにこれが交叉によってY染色体に乗り移ることがある。

そうするとOと入れ違いにY染色体上にあった雄の生殖能力に関係する遺伝子をもった部分M′がX染色体上に移ってYから失われてしまうことになる。このようなY染色体が O^+ 遺伝子をもったXと組み合わされば，$X(O^+)/Y(O)$ となって三毛雄ができる。しかしこの雄は異常なY′をもつため生殖不能となるものと考えられる。■

漢字のふるさと　16



藤堂明保

猫（ねこ）　呉音ではメウ→ミョウ，漢音ではにごってベウ→ビョウと読む。隋・唐の中国語では mieu ，今の北京語では māo

この字は「犬」（けもの）＋音符「苗」からなっている。苗は，なえ床に生えた細い芽であって，「なよなよとして細い」という意味を含んでいる。そこで，妙（かよわい少女）や秒（細いイネ→細かな時間）などと，同系のことばだと考えてよい。

ネコを猫というのは，おそらく「ミャオ・ミャオ」と鳴く声からきた擬声語であろう。けれども「ミャオ」という音そのものに，前述のような，妙な語感をともなうことを忘れてはならない。

ネコはその声からして，妙になよなよとしている。おまけに，その姿が細くしなやかである。そこで，多分に陰性でかつ巧妙だ，という感じを与える。中国では，両頭蛇や三脚猫というのが，ずるい巧者を代表することばである。

『新唐書』では，「鼠は盗賊であり，猫は，それを捕えるのが本職だが，涪州（フーチョウ）の役人は鼠と結んでともに眠っている。これを猫鼠同眠という」と述べており，役人と結託して悪事を働くボスを「猫児頭」（マオルトウ）と呼ぶ。また武漢（ウーハン）の商人は，東西南北の交通のかなめに住むせいか人がスレている。当地の人には叱られるが，他省の人は，それを「猫頭鷹」（マオトウイン）と呼んで警戒する。どうも中国の猫は昔から，評判の悪い動物らしい。■

慣れてから外に出して，しばらく綱でつないでおいてもらうようにしないと，すぐ飛んで帰ってくる。ひろびろと田畑続きの田舎などで，人に頼んで遠くに猫を捨ててもらうと，どうしてわかるのか，もとの場所へ帰って来るのが多い。数キロも遠くへ捨てても，猫はさがして，ちゃんと戻って来る。ヘイ，ただ今と言った感じで，顔を出す。一度橋を渡って川を越して捨てればよいのだと言う話さえある。日本の猫がいつまでも田舎猫の性質でいるせいだと思う。

私は60年以上も猫といっしょに暮らして来たので，猫の地理的感覚が，どの程度あるものか知りたいと思った。しかし，家猫は求愛の季節のほかは，家を出て遠くへ行くことは，めったにない。外出する私を送って門まで来ても，外まで，いっしょについて来ることはない。道路に犬が出て来る危険もあるが，猫は本来，目的のない散歩を好まず外出を避ける，内娘である。家猫の家猫たる所以であろう。私が外を歩いて，家の猫を見かけた範囲から判断すると，普通猫は，300メートル移動出来る蚊よりも，外出しても原則的に狭い場所を歩くだけらしい。恋愛が猫のこの非運動性に例外的に変更を加える。

私は自動車の通る国道を渡って，かなり先の繁華街の家の屋根に，我が家の猫の1匹が居るのを見つけた。声をかけて名を呼んだが，恋に狂っているせいかこちらを見向きもしない。100メートルばかり離れた路地を，せっせと歩いて行くのを見つけて名を呼んだら，警戒するように，ちょっと振り返って見ておきながら，御恩になっている御主人とも見えなかったらしく，道ばたの生垣の根をくぐって，忽ち，姿を隠した。外で出会ったら，主人でも知らぬ顔をして済ます習慣なのである。

1匹だけ例外があった。前に出たトンベエの息子の「小トン」と言う白猫である。私たち夫婦が外出すると，外に出て，路地の入口にある湯屋の屋根に腹ばいになって待っていて，私たちが帰って来ると，向うから「にゃあ」と，ひと声かけて迎え，ひらりと地に飛びおりるや，私たちより先に路地を，とっとと，調子をつけて駆けて戻る。家に先ぶれするように，それも自分がどんなに悦んでいるのか，可憐な手足の動かし方によく見て取れるような明るい動作で，先に立って帰る。長い歳月の間に，シャム猫もふくめて，夥しい数の猫と一緒に暮らしたが，この「小トン」が飛びぬけて悧口だったようである。その他の猫は，家の極く近くでなく外で出会うと，私を見ても私とわからないか，知らぬ顔をする。「小トン」は，夜でも私たちの足音を聞くだけで，それと判ったらしく，こちらで見つける前に，屋根の上から啼いて話かけて来るのであった。犬では珍しくないことだろうが，気位高く，少しお澄ましの猫たちは，自分の感情を人に見せるのを避けるものなのである。

日本の猫は，客間の虎に成らなかった。始終，こたつの上か，飼主の膝の上，または大根や渋柿を干してつるしてある農家の日だまりのひさしの上に，左甚五郎の睡り猫のような形で，まるく蹲っている。無類の怠け者が，別に客間の虎と成り都会的に成ろうとは努力しなかったのである。日本人がまた，猫を美しいと見る目を持たなかった。日光の「睡り猫」だって形の悪いブチ猫だし，浮世画の歌麿，春信などが美人の裾に添えてたわむれさせている猫でも，姿かたちも描く，顔は化け猫でも見るように醜い。あれだけ，人間の女体の美しさを見極めた画工たちが，猫については可憐さ美しさを見落としているか，描きそこなっている。

これは，明らかに，あまり猫を可愛がっていなかったと言うことだ。日本の猫は，田舎ものであった。田舎の爐端か長火鉢の猫板の上にいるのが最も似合い，都会は住むところでなかったのである。マンションやアパート生活から閉め出されて，猫は，いよいよ小鳥や蝶がまだいる田園に帰りたいものと，都会の月夜のトタン屋根の上，オキシダントの風の中で，ひそかに瞑想しているのではないか？ ■

古典動物園　その4
（最終回）

源氏物語と猫

池田弥三郎

猫などは，ありふれた動物だから，さぞかし，神代の昔から出て来そうなものだと思うが，ふしぎに，萬葉集などの，古い時代の書物にはでて来ない。

平安朝時代の辞書をみると，猫のことを，「家狸」と記していて，和名でこれを「ネコマ」という，としている。たぬきの一類と見られているのである。

猫は，「虎に似ていて，その小なるものだ」という説明も古くからあって，常に虎と比べられている。

　猫でない証拠に　竹を画いておき

という川柳は，下手な絵が，虎だか猫だかわからなくて，間違えられるといけないから，〝牡丹に唐獅子，竹に虎〟の約束で竹を画きそえておくということで，それほど虎とは似ているというわけだ。しかし，狸に似ていないこともない。

ばける，というのは，狸や狐や猫の特技であるが，それを詳しく観察すると，狐は，自分がばけもするけれど，主として，人をばかす方に活躍し，それに対して，狸の方は，自分がほかのものにばける方に活躍している。その点では，狸と猫とは似ていて，猫のおそろしいのは，自分がほかのものに姿をかえるからである。その意味で，猫は狸と縁が近いわけである。

源氏物語などには，「からねこ」が登場する。平安朝の「から」は，朝鮮ではなくて，中国である。中国渡来の猫というのは，必ずしも，中国特産，中国生まれ，ということではなく，ペルシャ猫などかも知れぬ。女性が，ふところにいれてかわいがったりしているところから，「からねこ」は，鼠をとらせるための実用から飼うのではなくて，全くの愛玩用だったらしい。

そういう猫が，小説に登場して，重要な役割を演ずるのが，この源氏物語にでて来る「からねこ」である。

光源氏の若い北の方であった，女三の宮――オンナサンノミヤとも，ニョサンノミヤともいうが，天皇の3番目の女の御子だから，「女」を付けていて，こう書いてあっても，サンノミヤという――というお方は，いつまでも子供っぽくて，唐猫をいつもふところに入れて，かわいがっている。上流の貴族だから，おそらく当時としては，ハイカラでエキゾチックな，外来種の猫を所有していたわけなのであろう。

この唐猫が，ある日，別の猫におどろかされて，女三の宮のふところからとび出して逃げ廻るはずみに，首につけていた紐がひっかかって，御簾がパアッとあがってしまった。本来なら，光源氏の北の方というような身分のかたは，奥深いところにひっこんでいるはずなのに，このお姫様は不用意であって，端近いところにでていた。簾のそとは，すぐに中庭であった。

ところが，運悪く，柏木の右衛門督という貴公子が，中庭をへだてて，きざはしに腰をおろしていて，女三の宮の御殿の方を見ていた。この柏木は，女三の宮がまだ光源氏の北の方にならないうちから，女三の宮に恋心を抱いていた人で，女三の宮が結婚して後も，なおあきらめないでいた。そういういわば危険人物が，ただでさえ思い焦れていた相手の姿を，はっきりと見てしまったのだから，柏木の恋心はますますつのり，いっそうせつないものとなっていったのであった。

源氏物語の作者は，こういう風に，唐猫をして，大事な役をさせているのだが，さらにこの同じ猫を次々に登場させる。柏木は，手を廻して，この唐猫を借り出して，恋しい人の移り香をなつかしみながら，愛玩するのだが，その後，光源氏の目を盗んで，ひそかに女三の宮のもとへ忍んでいった。そしてこの柏木の，とろとろと，まどろむともなくまどろんだ夢の中に，この女三の宮の愛玩の唐猫が，かわいげになきながら，柏木に歩みよって来た，と見て，目を覚ました。そして柏木は，おそろしさと後悔とのために，しとどに汗にぬれるのである。

平安朝時分の俗信として，猫の夢をみるということは，懐姙の前じらせなのである。たった一度の，道ならぬ逢瀬によって，柏木は，不義の子を，人もあろうに，もっともこの世でおそろしい，権威の座にすわっている光源氏の北の方に，みごもらせてしまったのである。

夢の前じらせは，まさしく冷たい現実となって，若い二人の身の上に現われて来て，遂に二人とも，そのために，身を滅ぼすことになってしまった。

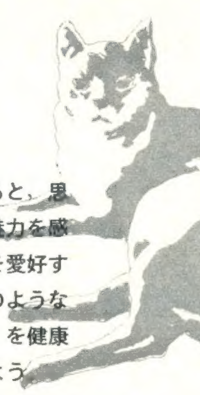
おそらく，日本の古典の中に現われる動物としては，これがもっとも有効に働いている動物であって，まさに，「古典動物園」の王者である。源氏物語の一つの頂点となっている，物語のいわばやま場に，実に巧妙に，女主人公のペットの唐猫が，活躍するのである。

猫は，「寝子」ということばが語原だという説がある。それほどしょっちゅう，香箱をつくって（猫が眠っている様子），日なたで，寝てばかりいる。

猫は，クラシックな感じよりも，むしろ，もっと親近感が深く，「猫なで声」などは，今も生きて使われている語だ。「猫ばばをきめこむ」などということばは，いかにも猫の動作を誰もがよく見ているところから，その実感の上に通用している。糞をして，後足で砂をかけるのが「ねこばば」だが，拾った物をそのまま自分のものにしてしまう，というような，ちょっとした出来心の軽犯罪を言うのに，猫の形式的な糞の後始末をいうことばを持って来たわけだ。犬にだって同じように，形だけ砂をかけることもあるけれども，「いぬばばをきめこむ」とは言わないで，猫の動作に持っていったところが，なかなか観察がこまかくておもしろい。■

ペット相談室 あなたのプシーを健康に

増井光子



ネコの大きな目でジーッとみつめられると，思わず引きこまれてしまいそうな妖しい魅力を感じる。この魔力のせいか，最近はネコを愛好する人がふえてきている。ここでは，どのような点に注意すれば，プシー（ネコちゃん）を健康で，美しく飼えるかについて述べてみよう。

◁子ネコの時代▷

子ネコは生後50～60日ぐらいすると，からだつきもふっくらと，いかにもかわいらしい姿になる。はじめて子ネコを飼う人は，このころに入手するとよい。選ぶときは，からだがよく引き締まり，手で持つとズッシリと手ごたえがあり，毛はフワリと手ざわりがよく，目は生き生きとし，好奇心の強いものを選ぶ。目や鼻がクシャクシャしたり，腹ばかりふくれていたり，肛門（こうもん）がよごれていたり，毛のつやの悪いものは，病気のあるネコとみてよい。

寄生虫症：子ネコはよく寄生虫をわかしているので，引きとってきたら，まず獣医に検便をしてもらう。よくみかけるのは，長さ３～10センチほどの回虫で，小腸に寄生している。回虫が多数寄生すると，ネコの腹は異様にふくれ，貧血を起こし，嘔吐や下痢などがみられる。そのほか十二指腸虫，条虫，コクシジュウムなどがある。

猫伝染性腸炎：４～６か月ぐらいの子ネコがもっともかかりやすく，死亡率も高い。ウイルスが原因で，経過は急性である。症状は，40度以上の高熱と激しい嘔吐と下痢がみられ，ネコのからだは水分を失い，衰弱して死亡する。治療は抗生物質を与え，免疫血清，多量のリンゲルなどの注射が必要である。また，この病気にはワクチンがあるので，予防注射を受けておくことをおすすめする。

ウイルス性鼻気管支炎：この病気も子ネコのほうがかかりやすい。症状は40度以上の高熱がみられ，クシャミ，目やにや鼻水がしきりに出て，顔がクシャクシャによごれてくる。そのために呼吸が苦しくなり，食欲も減退してしまう。治療法は，抗生物質を与え，病室には蒸気を立てて湿りけを保ち，鼻のまわりにこびりついている汚物を，ときどき1,2パーセントの微温の硼酸水で，そっとぬぐって取り除いてやる。

鼻カタル：これもウイルスや細菌感染が原因であるが，肺炎のようにひどくはならない。しきりにくしゃみをし，そのときに，鼻汁が吹きとばされて出てきたり，目やにが出ることもある。体温はそれほど上がらないが，慢性になりやすく，ひどいときは蓄のう症になったりする。多数のネコを飼っているところでは次々と伝染し，慢性になったものは，絶えずズーズーといびきのような音をたてたりする。治療には抗生物質やサルファ剤を与え，経過がよければ1,2週間でなおる。

クル病：日常の食物中にカルシウム分が不足すると，この病気になってしまう。だいじなペットののどに骨でもつかえてはと，魚の小骨まですっかり取り除いて，身の部分ばかり与えている人がいるが，これでは，わざわざクル病に仕立てているようなものである。クル病になると，動作が不活発となり，遊ぶことをいやがり，ちょっとしたところから飛び降りても足をくじいたり，腰を痛めたりしてしまう。クル病の原因は，カルシウムの欠乏のほかにも，たんぱく質や，リンとカルシウムの比率や，ビタミンDの問題などなかなか複雑である。

ネコに必要な栄養素としては，日常のえさに脂肪25～30パーセント，たんぱく質30～40パーセントが必要で，従来いわれてきたカツオブシかけの御飯などでは，とてもりっぱなネコには育たない。ネコの食餌としては，市販のキャット・フードなどもあるが，魚，アラ，モツ，ミルクなどのほか，パンやうどんなども少々与える。２～６か月ぐらいまでの子ネコは，まるで食欲の権化みたいで，１日に自分の体重の５分の１から７分の１ぐらいの量を食べてしまう。この量は成長するにつれてしだいに減じ，成猫では，１日約300グラム前後で，体重の約10分の１となる。

ネコは汁の多いベチャベチャしたえさよりも，かわいた感じのものを好み，清潔好きで，食器などもきれいにしてやったほうが喜ぶ。またネコは割りに保守的で，食べなれたものしか食べない傾向があるので，偏食にならぬように，子ネコのうちからいろんなものを与えたほうがよい。

◁成猫の時代▷

ネコは成長の早い動物で，雌は９か月ぐらい，雄は９～12か月ぐらいで成長がとまってしまう。大部分の雌は生まれた翌年の春に発情し，雄は１年もすれば繁殖に用いられる。

膿瘍：冬から春にかけて，雄は恋がたきとの屋根の上での決闘で受けた傷が化膿することがある。ネコのつめは小さく鋭くて，たくさんのばいきんが付着しているから，そのひっかき傷は化膿しやすい。よくみられる部位は，耳の後ろ，首，顔などで，腫れてくるのでそれとわかる。ときには，小さい傷口から膿が出ていることもある。治療は切開して排膿し，抗生物質を与えてやる。

皮膚病：原因には食事性のもの，ホルモンのアンバランス，真菌（かび）によるもの，疥癬（皮膚につくダニの一種）の寄生によるもの，ノミなどの寄生する刺激によるもの，手入れふじゅうぶんなど，種々の原因がある。症状は，脱毛，発赤，丘疹，痒覚などがみられるので，変状をみつけたら，専門医によく調べてもらったほうがよい。

妊娠：妊娠（にんしん）期間は約63～65日である。妊娠中は，胎児のために母体の骨から多量のカルシウムがとられてしまうので，食物にはじゅうぶん注意して，カルシウム不足にならないようにしてやる。また出産後も哺乳（ほにゅう）のため，親には栄養分のあるえさをじゅうぶん与えるようにする。

結石症：雄ネコにときどきみかける。尿のしかたが異常になり，しょっちゅう尿意をもよおし，そのくせなかなか排泄できない。ひどいときは血尿が出たり，まったく出なくなるときもある。これも専門医にみせたほうがよい。

中毒症：ネコは薬物に対して，たいへん過敏である。ノミの駆除には，ＤＤＴやＢＨＣなどより，ピレトリン系の薬が安全である。またネズミ取りの毒薬を食べて死んだネズミを食べて，中毒することがままある。症状はその毒物によって異なるが，嘔吐，下痢，貧血，昏睡，けいれん，虚脱などが一般にみられ，救急処置が必要なので，すぐに病院へいったほうがよい。

毛球症：これは長毛種によくみられるもので，ネコが自分のからだをなめてきれいにするときに，誤って体毛をのみこみ，それが胃内でだんだんと球状に固まるのである。毛球が小さいうちは，自分で嘔吐するが，大きくなりすぎると胃いっぱいになり，また小腸につまることもある。こうなると，手術よりほかに方法がない。予防には，長毛種は毎日の手入れ，とくに換毛期には，手まめに手入れを励行することである。

黄色脂肪症：不飽和脂肪酸の多い食物を，長い間食べることによって起こる。おもに魚を主食としているネコにみられる。種類としては，シャムネコが多いように思われる。症状は食欲がしだいになくなり，皮下脂肪がかたくなり，腹部などでは，手で触れると板のような感じがするようになる。治療にはビタミンＥを与え，食事を改善する。

◁老猫の時代▷

10歳近くにもなると，そろそろ老境にはいり，ネコはあまり外へもいきたがらず，じっとひなたぼっこなどを好むようになってくる。歯もそろそろいたんだり，抜けたりしはじめるころなので，食物に気をつけ，消化のよいものを与えるようにする。

歯槽膿漏：歯石や虫歯が原因となることが多い。悪臭のあるよだれをたらし，ほおが腫れ，痛みのために食欲が減退する。治療は原因を取り除き（歯石をとったり，虫歯を除去する），抗生物質を与える。

便秘：運動不足なども一因となるが，老猫には多い。重症の場合は，食欲もなくなってしまう。手で腹部をさわると，かたい糞塊に触れたりする。軽症なら浣腸，腹部マッサージで排泄できるが，ひどいときは手術をしなければならないこともある。老年性の便秘は習慣になりやすい。

そのほかにも，火傷，腫瘍，結膜炎，熱射病，腎炎，肝炎など，いろいろな病気がある。最近では，交通事故による外傷も多い。

要するに，ネコの健康のためにたいせつなのは，異常の早期発見と早期治療であり，こじらせてからではなかなかなおりにくい。その早期発見には，日常の注意深い観察が必要である。異常をみつけたら，すぐに専門医にみせることが望ましい。それが結局，あなたのペットをいつも美しく，そして長生きさせる秘訣にもなるわけである。■

（多摩動物公園動物病院）

裏表紙説明

ペルシャネコ　毛色が赤いペルシャネコは，日本ではまだ珍しい。数年前にアメリカから輸入されてから，現在約30匹が飼われているだけである。写真は生後２か月の子ネコで，毎日２,３回，生肉をピンポン玉ほど，チーズは角砂糖の半分の量を食べているという。価格は３～10万円ほど。■　　（撮影　菅野喜勝）

▶本号は『ネコ特集』のため，『アメリカバイソンの悲劇』『ヒグマと２人のイノシシ』『もうひとつの世界』『海中動物の生活』は休載します。

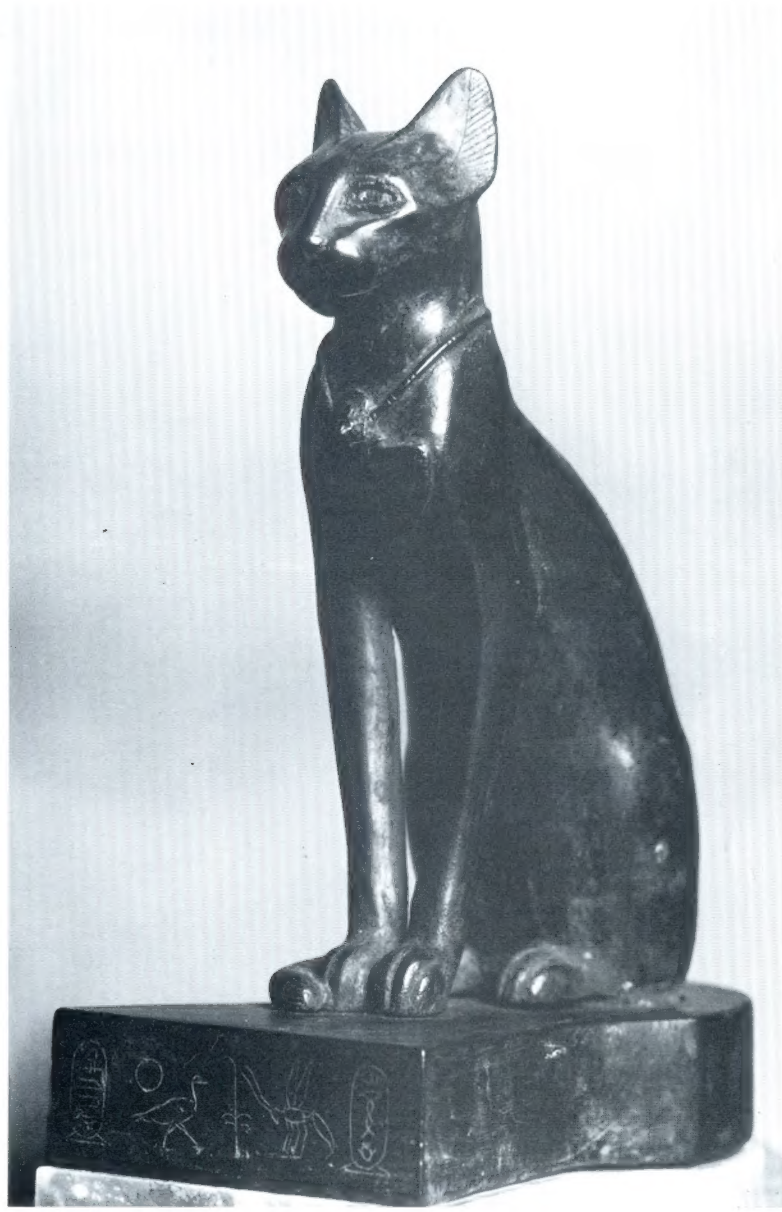
ギャラリー

猫



古代のエジプトにおいては，最も重要な神ホールスの化身である鷹をはじめ，猫，豹，蛇，鰐，かささぎなど，さまざまの動物が信仰の対象として崇拝された。それは，原始宗教にしばしば見られるアニミズムの一種で，それぞれの部族が，自分たちの守り神としての動物を持っており，その動物は，神聖にして犯すべからざる，尊い存在と考えられていたのである。

したがって，ここに掲げられた猫の像も，むろんただの猫ではない。デルタ地方のブバスティスには，猫神に捧げられた神殿があって，そこにはさまざまの姿の猫の像が奉納されていたというが，これも，そのような信仰対象としての猫像である。猫に対する信仰は，特にサイス王朝時代に盛んで，その像姿も，顔だけ猫で身体は人間の女という怪物のようなものから，子猫に乳をふくませている微笑ましいものまで，さまざまであるが，最も普通には，このように前脚を立てて座ったポーズで表わされる。そして，その大部分のものは，高さが20センチ前後の小像であるが，しかし，両耳をきりっと立てて，真正面をじっと見詰めているその姿には，堂々とした威厳すら感じられる。全体の形，特に首筋のところの丸味や，前脚を構えた様子などは，猫の特徴を見事に捉えて，生き生きとした生命感を与えるのに成功しているが，それでいて，何か永遠の世界に通じる厳しさを感じさせるところは，エジプト彫刻の特質をよく示している。■　(高階秀爾)



エジプト
紀元前6世紀ころ
ブロンズ
高さ　18センチ
ルーブル美術館

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

❶概説 I　生態学，自然保護
❷概説 II　動物分類学，生物学的環境
❸霊長目　ゴリラ
❹霊長目　チンパンジー，オランウータン
❺霊長目　テナガザル，オナガザル
❻霊長目　カニクイザル，ヒヒ
❼霊長目　キヌザル，オマキザル
❽霊長目　メガネザル，キツネザル，アイアイ
❾食虫目　ツパイ，モグラ，ハリネズミ
❿翼手目，皮翼目　コウモリ，ヒヨケザル
⓫齧歯目　ヤマアラシ，チンチラ，ミズブタ
⓬齧歯目　トビネズミ，ヤマネ
⓭齧歯目　家ネズミ，野ネズミ
⓮齧歯目　レミング，ビーバー，ハムスター
⓯齧歯目　リス，ムササビ
⓰齧歯目　ウサギ
⓱食肉目　チーター，ライオン
⓲食肉目　トラ
⓳食肉目　ヒョウ，ジャガー
⓴食肉目　ピューマ，ヤマネコ
㉑食肉目　イエネコ
㉒食肉目　ハイエナ，マングース
㉓食肉目　ジェネット，カワウソ
㉔食肉目　スカンク，アナグマ
㉕食肉目　テン，クロテン
㉖食肉目　ミンク，イタチ
㉗食肉目　パンダ，アライグマ
㉘食肉目　マレーグマ，ホッキョクグマ
㉙食肉目　ヒグマ，ツキノワグマ
㉚食肉目（畜犬）　盲導犬，警察犬ほか
㉛食肉目（猟犬）　グレーハウンド，セッター
㉜食肉目（番犬）　コリー，セントバーナード
㉝食肉目（ペット犬）　ニホンイヌ，チワワ
㉞食肉目（野生犬）　ディンゴ，リカオン
㉟食肉目　キツネ，ホッキョクギツネ
㊱食肉目　オオカミ，コヨテ
㊲食肉目　アザラシ
㊳食肉目　セイウチ，オットセイ，トド
㊴奇蹄目　サイ，バク
㊵奇蹄目　ウマ概説
㊶奇蹄目　サラブレット，ポニー
㊷奇蹄目　ロバ，ラバ，シマウマ
㊸岩狸目，長鼻目　イワダヌキ，ゾウ
㊹偶蹄目　カバ，ペッカリー
㊺偶蹄目　イノシシ，ブタ
㊻偶蹄目　ヒツジ，ビッグホーン
㊼偶蹄目　ヤギ
㊽偶蹄目　ヤギ（飼育種）
㊾偶蹄目　レイヨウ
㊿偶蹄目　ブラックバック，クロレイヨウ
(51)偶蹄目　ダイカー
(52)偶蹄目　アフリカスイギュウ
(53)偶蹄目　ウシ，コブウシ
(54)偶蹄目　クードウ，プロングホーン
(55)偶蹄目　キリン，オカピ
(56)偶蹄目　トナカイ
(57)偶蹄目　シカ
(58)偶蹄目　ラクダ，ラマ
(59)貧歯目，有鱗目，管歯目　アリクイほか
(60)海牛目，鯨目　ジュゴン，ナガスクジラ
(61)鯨　目　イルカ，マッコウクジラ
(62)有袋目　カンガルー，コアラ
(63)有袋目　バンディクート，フクロネコ
(64)単孔目　カモノハシ，ハリモグラ

以下(65)～(128)　鳥類　(129)～(144)　両生類，爬虫類
(145)～(160)　魚類　(161)～(192)　昆虫類，甲殻類

世界動物百科　通巻21号　昭和46年8月1日発行　（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　**定価220円**



ペルシャネコの子ども　　説明　34ページ

雑誌コード　0631